



婦人の子と母



第三卷第二號



# 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行	毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行
定價	一冊金拾錢○六冊前金五拾七錢○拾貳冊前金壹圓拾錢○郵稅各一冊一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。
入會者	は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會あて申し込まれるれば雜誌は無代價にて送呈すべし
讀者	は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神山今川橋又は日本橋區本町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限る○十二枚封入にて申し越されたし○前金相切られ候節は赤にて印を御姓名の上へ附し候に付し早速御送附されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新寄共に御通知を乞ふ
編輯	に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと
廣告料	一頁十圓半頁五圓

明治三十六年二月二日印刷  
同 年二月五日發行

發行所	東京市本郷區元町二丁目六十六番地
編輯者	東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所	女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所	東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發售所	東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京東京堂●同東海信文合資會社●河北隆館

婦人と子ども第參卷第貳號目次

子ども

打出の小道具(やまとの翁) ●伊蘇普物語(牧羊) ●  
お日様と風(やよひ) ●考へもの、解 ●福引

家庭

いらぬ干渉とみはり……………ふのみ子

家庭閑話……………その子

乳母の選み方につきて……………富山高等女學校 米の女子

小兒の感化……………越後桑田敏子

富士ちゃんの日記……………會員某女子

一週間の献立……………會員某女子

學術

小笠原父島の二見港……………や、て

史傳

エドワード、デロング……………米 深

文苑

女五首……………佐々木信綱

吾孀の歌……………た、き、生

御代はぎ……………つねを

若き人のわづらひ……………小林雨峰

お年玉……………金田みず子

説林

讀書につきて……………牧羊生

雜錄

きさらぎと其異名……………せく生

服裝の事(下)……………彌生譯

霞と霧……………摩詳生

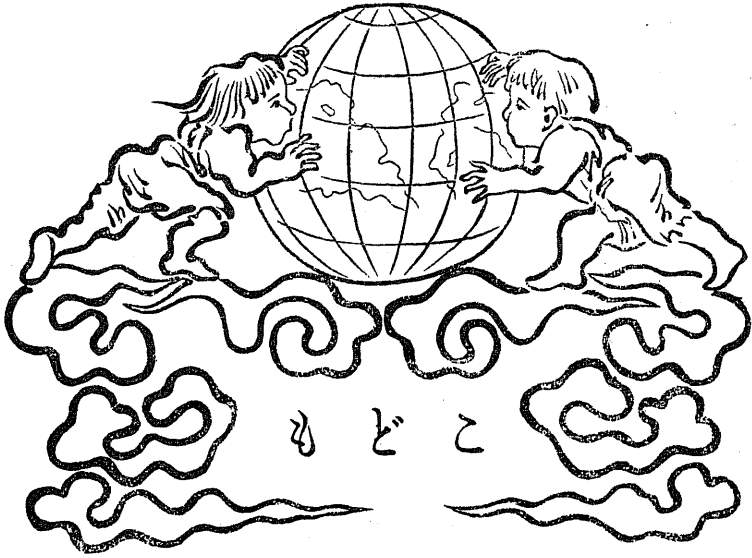
幼稚園保育上の誤謬……………キンデルガルテンレヂエー

サンサイ……………原米女

彙報

歌御會始 ●女子高等師範學校 ●女子高等師範學校入學試驗問題 ●  
東京府女子教育會 ●暹羅文部次官と幼稚園 ●江原素六氏の食事修  
身談 ●肺病の傳染に付きて ●有名なる音楽家の報酬 ●色を以て精  
神病を治す ●這美美讀 ●教員檢定本試驗問題 ●會報

も どり と 人 婦  
號 貳 第 卷 參 第



打出の小道具 (ついき)

やまとの翁

さらば、一奮發して、この老爺のために、惡漢を退治してやろーとゆー氣になつたから、龍吾は、その金槌を貰つて、そこを出て、やがて惡漢の住家の方へと急ぎました。

行く道々でも龍吾は、い

ろくくと計畧を考えて居ます。何でもまづ其不思議な法螺貝

とゆーのを、奪い取って置かないと、ひよつとかして夫を吹か

れて、數しれぬ手下どもが顯われては、面だだからとゆーので

だんくくと其計略を考えながら行ききました。

暫く行つた所が、とーく一軒の家え行き當つた。これが

其男の住家なんです。龍吾が、案内を乞へて這入つて見ると、

何さま惡漢らしい男が一人で、火を焼いて、どこかで盗んでき

たのでしよー、餅など焼いて食べて居ます。

龍吾わ ちゃんと計畧を定めて居ますから、ピクともしませ

んで、其側え行きまして、

『やー、伯父さん、何かで馳走して上げよーか』

といーますと、其男わギロく眼を光らせて 龍吾の身なりを見回わしながら、

「フン 御馳走して欲しいのだろー」

といーますから、龍吾わ早速、例の古手巾を二三度振った所が、以前の様に チャンと御馳走がそこは并んだので、さー其大將、吃驚した、で、龍吾わ、

「ね、伯父さん、この通りだ、この手巾から 何でも好きな御馳走が出るんだよ、さー ね上んなさい」

とゆーもんだから 其男も、「これわ」とゆーので、夢中になって 飲んだり食べたりして居ます。

其隙を伺って、龍吾わ、例の金槌を、そーっと一ったゝいた

所が、いきなり大の男が一人、ひょいとそこえ出て來まして、龍吾に『何か御用でございますか』と聞きますから、龍吾わ又そつと『急いで奥へ行つてこの男の法螺貝を取つて來い』と言つて付けますと、『畏まりました』といつて引き下がつたが、暫くすると、大きな法螺貝を持つて來て、龍吾に渡しました。惡漢はも一夢中で飲んだり食つたりして居ますから、一向そんなことに氣がつかない。

さーこれさえ取つてしまえば、大丈夫だと思つて、龍吾わ又其男にいつつけた。『すぐ此惡漢を縛つて仕舞え』しきりに酒に酔つぱらつて居た惡漢は、すぐ其男に取つてれさえられまして。

それから、龍吾は、其奴を縛り上げて、だんだん、責めつけた所が、と一へ隠し切れないで何もかも白状して、龍吾に降参しまして、取り上げられた法螺貝の外に、又た不思議な陣笠を以て居たのを、夫も龍吾に献上して、夫でやつと命を助けて貰うことになりました。其陣笠とゆーのは、まことに不思議な力があつて、夫を頭に冠つて押しつけると、忽ち二十四門の大砲が、顯われるとゆー、まことに奇妙な品であります。

さし、こゝなつて見ると、龍吾わ、大變に豪い者になつた。御馳走の出る古手巾に、家來の出る金槌に、夫から、何百人とも數知れぬ軍勢の出る法螺貝に、も一一つ二十四門の大砲の出る陣笠だ。



そこで、龍吾わ考にしました。もー大丈夫。これ丈けあれば、己わ天下敵なした。やれく正月早々随分、辛抱したが、其代り大した福を見附けたもんだ、どれほつく歸つてやろーかな、などゝ考えながら、家え歸ることになりました。

夫から、龍吾わ、方々を見物して、やつと正月もすぎで、二月の始の頃に、自分の故郷に歸ることになりました。所が、丁度歸つて見ると、大變な騒が持ち上つて居た。とゆーのわ、一体、龍吾の國では以前からしきりと盜賊どもが、出沒徘徊て、良民を苦しめて居たのだが、この頃の不景氣につれだんぐ烈くなつて、丁度龍吾が歸つた時にわ、この盜賊どもが

何百人とゆへ大勢となつて市中を荒らしまわつて居た所でした。

龍吾の兄様の金一に銀造の二人などわ、前に澤山な金や銀の塊を拾らつて歸つて夫で以て、立派な家などを建てゝ居たのが、此盜賊の爲めに。丸で跡形もなく焼かれてしまつたり、其他の人たちも、皆家を焼かれたり、れ金を盗まれたりするもんだから、役人たちも驚いて、大勢の兵隊を出して、打ち退けよーとしたのだが、賊の勢が強い爲めに、皆あべこべにうちまかされて逃げ返つてくる様な有様で、この事がとく國王までも聞えて、國王からわ懸賞で以てこの賊を征伐する勇者を探すことになりました。

そーゆー所え 龍吾が歸つて來たもんだから、すぐれ役所え  
 出で、この盜賊どもわ、私が征伐して打ち亡しましよーと申し  
 出ました。

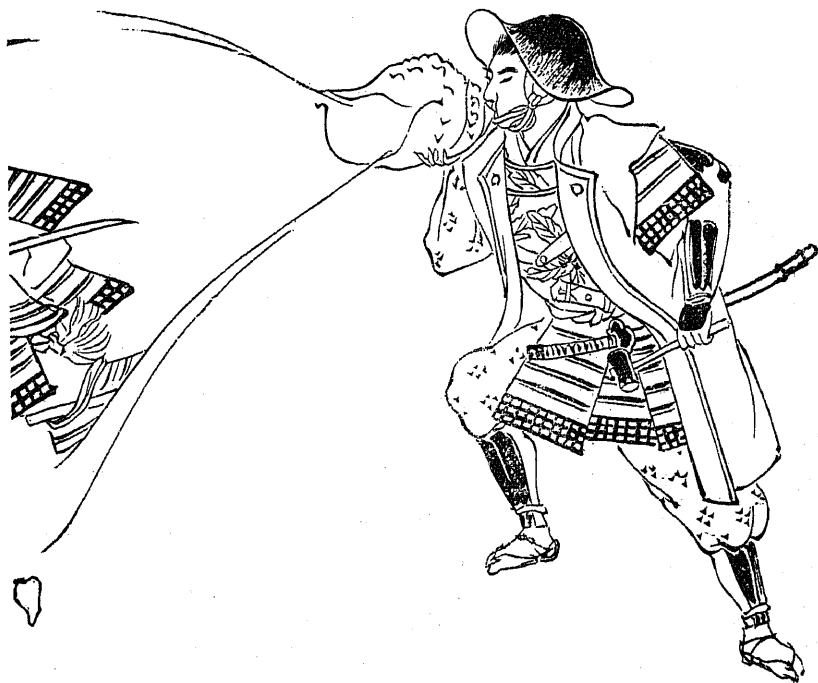
そこで、龍吾が大將になつて、れ役所からわ、れ役人だの澤  
 山な兵隊がついて出て行きますると、向ーから、數知れぬ賊軍  
 が弓を射たり、鐵砲を打つたりして 勢よく進んで來る。其勢  
 に恐れて、ついて來た役人だの兵隊だのは、もーそろく逃げ  
 始めた。けれども、龍吾わ 少しも恐れないで、たつた一人  
 で ぶんぐ 敵に向つて進んで行つた。賊どもわ、龍吾を見て、  
 たつた一人だと思つて ますく 悔つて やつて來た所を見計  
 らつて 龍吾わ 例の金槌を出して 一つたよくと 大きな男

が甲冑よろいかぜとを着けて、ぬつと出て来て、「何か御用ごようわ」と聞くから、「オー、あの軍勢ぐんせいの中に分け入いって、賊ぞくの大將たいしやうを打ち取とれ」と命令めいれいを下くだすと、「かしてまりました」と言いって、大男おおをとこわ、電光いんぱんの様に、賊ぞくの中なかえ、驅かけ入いって仕舞しまいました。續つづいて、龍吾りゆうごわ、腰こしにぶら下げた法は螺貝らがいを出だして、一いつ聲高せいたかく吹ふきたてた所ところが、さー出でたとも、出でたとも、何千なんせん人びんとも知しれぬ軍勢ぐんせいが、一いち度どにとつと列れつを造つくって顯あらわ

れた。

賊軍ぞくぐんわ、此この有様ありさまに驚おどろいて、さてわ、敵てきの伏勢ふせにかゝつたと思おもつて、急きんに引ひき退ひきぞかうとする時に、龍吾りゆうごわ、こゝぞと、冠かむつて居いた陣笠じんがさを抑おさえた所ところが、二十四門にじゅうよんもんの大砲たいぱうが、ずつと其處そのところえ并ならんで出でた。そこで龍吾りゆうごわ、「すゝめつ」打うちてつ」と號令ごうれいをかけると、軍ぐん

勢どもわ、「わーっ」と  
叫んで突進む、二  
十四門の大砲わ一度  
にドーンドーンと  
打ち出す。賊どもわ  
這々の体で狼狽え  
騒いで逃げ出すを追  
っかけ追っかけ  
進んで行く中に、例  
の大男わ、逃げる敵  
の真中から賊の大





將の首を取つて、刀の尖につき通して、龍吾の所え持つて來ました。

此軍で以て、さしもに烈しい賊どもも、残らず討死したり、又わ降参したりして、一人も敵對するものがなくなつて仕舞つたので、龍吾わ例の法螺貝だの、陣笠だの、金槌を仕舞つてしまふと、軍勢も大砲も大男も、すっかり消えて仕舞いました。そこで擒にした盜賊どもを、珠數繫ぎにして一人で以て役所え引つ立て、歸つて行きました。

さう、こゝになると、龍吾の評判わ、大したものので、とて國王からお召しになつて、澤山な褒美を頂いた上に、此國の軍隊の總大將軍とゆゑ立派な役になりましたとさ。めでたしく

● イッソフ、ムカガリ  
伊蘇普物語

牧 羊 譚

其一、獅子と二十日鼠

一匹の獅子が、心地よく寝て居ると、二十日鼠がやって来て、五月蠅く獅子の顔の邊を駆け歩いて目を覺ませたので、怒るまいことか、不意起き上って鼠を引っ捕へて踐み殺さうとしました。すると鼠は、さも悲し相に謝って『もー生命丈けお助け下さる事なら、屹度御恩返しは致します』といひますので、獅子は なーに、鼠のくせに何をいふかと云ふ風に笑ひながら宥してやりましたこの事があつてから暫くして、この獅子が 獵人の罠らへた係蹄に引っかゝつて、太い綱で身動きも出来ぬ様に縛られたもんだから、さすが獸の王

も何事も出来ないで たい大聲で吠えてばかり居ました。その聲を聞きつけて 以前の二十日鼠が出て来て 其綱をしきりと噛り切つて とうとう獅子を助けて、さて、申しますには、『先日、お前さんは 私の様なものから恩返しなどを受けない積りで、いつか私がお前さんを助けることもあらうといったのをお笑ひなすつたじゃありませんか、今こそ、お前さん 二十日鼠だつて獅子さんを助ける力があることが、お分りになつたでしょう』。

其二、狼と仔羊

狼が或晩羊小屋から迷ひ出た一匹の仔羊に出遭つて、すぐにも、捕つて食はうかとも思つたけれども、何か 自分が仔羊を取つて食う丈けの權利があることを知らせて置いて とても食はれても仕方がないと諦めさせてからにしやうと思つたから



次の様に咄しかけました『小夜さん 去年だったか、お前さん大變僕を輕蔑した事があつたけね』すると仔羊は さも悲し相に申しました『マー、あんな事を、だつて妾其時まだ生れてなかつたのだわ』これは失敗つたと思つて狼は又『そーくお前さん いつも僕の所の草を食つて行くね』といふと仔羊は『あら、まあ、妾まだ草なんか食べられないのよ』狼は又やり損つたと思つて今度は、『そーだつた、お前さん 僕の所の井戸の水を飲みに来たけね』といふと『いーえ、妾水なんかまだ飲まないわ、だつて母羊さんのお乳があれば、外に食るものも飲むものも要らないのよ』そこで狼は恐ろしい目を光らせて、不意仔羊を引つ捕らへて、たゞ一口に食べて仕舞つた、で獨り言を言つて居ます、『マー、いーや、お前さんは、そんなに一々

辨解はしたけれど、どの道僕は夕飯なしには濟まされないからね』

悪人は悪い事をするに、何か知らん口實を見附け出します。

其三、驢と鈴虫

鈴虫が毎晩く善い聲で鳴いて居るのを、驢が大變に感心して聞いて居ましたが、どうかして自分もあんな善い音楽を歌う様になりたいもんだと思つて、鈴虫に、一体何んな食物を食べて そんな善い聲になつたかと 聞いた所が『露ですよ』と皆の鈴虫が答へました。そこで驢馬は、露ばかり食べて 他の物は一切食べないで居りましたが、すぐとお腹がペコ／＼になつて餓死した相です。

(以下次號)

## お日様と風

## やよひ生

或る冬の朝、お日様と風とが、どちらが、をら  
いかと言つて、やかましく、喧嘩をして居りまし  
た。丁度、其の時、暖かそうな大きな外套を着た  
一人の旅人が通りかゝりましたから、二人は相談  
をして、彼の旅人の外套を脱がしたものが、一番  
をらしいものにしようといふことになりました。そ  
こで、風は、一生懸命になつて吹き出しました。  
すると、旅人は、驚いて、外套の前を押さへて、  
中腰になつて駆け出したから『之では行かぬ』と  
思つて、風は躍氣となつて、ある限りの力を出し  
て、ピユ〜と烈しく、吹きましたが、旅人はま  
す〜驚いて、愈々緊しく押さへたものですから

どうしても外套を脱がすことが出来ません。風は  
さも、口惜しさうにして、額の汗を拭いて居りま  
した、お日様は、是れを見て、笑ひながら、『風さ  
ん〜一寸私のするところを御覧なさいよ』と言  
ひながら、急に、強く、照り出しましたから、だ  
ん〜暖かく、又おひ〜に、熱くなつて來まし  
た。すると、旅人は『おや〜、風がやんだと思  
つたら、急に暖くなつて來た、……ア、又馬  
鹿に暑くなつて來たもんだ』といひながら、とう  
〜、其の外套を脱いで仕舞ました、おまけに暑  
くて、堪まらなくなつたと見えて、路傍の小川に  
下りて行つて、赤裸となつて、水を浴び始めまし  
た、風は、始終黙つて、此の様子を見て居ました  
が、成程と感心して、お日様の前に手をついて、  
とう〜、恐入たそうです。

●考(もの)

●前號の解

(一) 一字引きの中。

(二) 火鉢(二八千)

(三) 宮本武藏(三八百十、六三四)

●問題の答 解答者 東京 非狂生

(一) 島がないのに福島縣といふが如し。

(二) 他の獸もでさるに但馬國といふが如し。

(三) 人口の少き國を多う住み(大隅)といふが如し。

●福引き

(一) 錢なしの旅行。 苦痛旅(靴足袋)

(二) 幼稚園の子供。 仲よく見える(硝子瓶)

(三) 怠け者が多くては。 日本(の)の赤恥(赤い箸二本)

(四) 清戦争の勇將。 佐藤少將(砂糖を少し)

(五) 獨り子を旅へ出す母心。 案じる許り(餅の入

らぬ汁粉)

家庭



いらぬ干渉とみはり

ふみ子

よく教育のことをわきまへて居る人の家庭では  
そんな事はありませんが 上流社會の様に手の多  
い所や 小兒の教育に氣を付け過ぎる家庭にまゐ  
りますと「そんなに大きな聲を出すのではありま  
せん」とか「そうわちこち歩きまはらずにじつとお  
すわりしていらつしやい」とか または「今はこの  
玩具でお遊びなさい」「庭の何處でお遊びなさい」

とか「今日は朝から運動が足りないから庭にいつて鬼子をしていらつしやい」とか、それはくく一から十まで、細かく干渉して、始終大人の思ふ通りに小兒を動かそうとして居るのを見うけることがありません。そして、只こまかく命令禁止するばかりでなく、絶えず小兒の傍について居て、看守が囚人でも見はつて居る様な眼をもつて監督して居る大人もありませんが、斯様に朝から晩まで小兒を見はつて居る大人の骨折はなかく一通ではありますまい。そして小兒のためにはかへつて大なる不幸でございませう。尤も幼兒の時代は服従時代であります。それは幼い間はまだ善惡のわきまへがつきませんから、若しすべて其欲するまゝに放任して絶對的に自由に任かせて置きますと、これは勿論小兒の身心に不爲であるばかりでなく、手

のつけられぬ大變な我儘ものになりますから、大人はこゝをよく考へて、適當な注意を以て或る時には小兒の自由に任せ、或時には大人の意志に従はせるべきものであります。そうして小兒は此の大人の意志即ち命令なり禁止なりに絶對的に服従すべきものであります。また、小兒は大人が十分注意いたしませんと、いつの間にか色々傾いてとんだ方に向つて容易に取りかへしのつかぬ様な結果を來たすことがありますから、能くこまかく氣をつけて居らねばなりません。ですから至當の命令禁止監督は申すまでもなく必要であります。けれども其命令禁止や監督も各其度があります。大人が自分を標準として小兒に命じ、また禁止する事の中には、小兒に取つてどれ程不自然の事があるか知れませぬ。例へば小兒が家の外で遊んで

も内うちで遊あそんでも別べつに差支さしかへのない場合ばあひならば其そののど  
ちらで遊あそぶかは小兒せうにの自由じゆうに任まかせて置いてよろ  
しうございませす。左様さやうな時に小兒せうにが戸外こどわいで遊あそうと  
望のぞみましたらば 此このは其望そのぞみに任まかせてよいの  
であつて 何なにも大人たいじんが無理むりに命めいじて内うちで遊あそばせる  
必要ひつたうはありませせん。また同おなじ遊あそびますにも 草花くはな  
を摘つんで遊あそんだり 石いしころを拾ひろつて遊あそんでも ま  
ゝごとをして遊あそんでもかまはない場合ばあひには どちら  
らをして遊あそんでも 小兒せうにの随意ざいゐにして置おいて差支さしかへ  
はありませせん。大人たいじんが「草花くはなを摘つんでお遊あそびなさ  
い」とか「まゝごとをしてお遊あそびなさい」とか命めい  
じしない方がよろしうございませす。  
自由じゆうに放任ほうにんして置おいてよい様やうなこまかい事ことにま  
で 一々いちいち命令めいれいしたり禁止きんししたりして居ゐりますと  
小兒せうには一寸ちよつとしても何かなにいはれませすから だんゝ

手ても足あしも出でなくなつて縮ちぢんでしまひませす。そこで  
自分じぶんで働はたらくといふことが少すくくなりませす。從したがつて自治じち  
の心こころも勇氣ゆうきも少すくくなりませす。其その上うへ一方ひたうでは次つぎの様やう  
な弊害へいがいがありませす。それは 此このういふ風ふうになりま  
すと自然じぜんに命令めいれいや禁止きんしの數かずが多おほくなりませして其上そのうへ  
其中そのうちには必要ひつたうなものもありませすが 不ふ必要ひつたうなものが多おほ  
くありませす。そして小兒せうには一々いちいちこの多おほい命令めいれい禁止きんし  
に從したがふことは出で來きませせんから 勢いきほひ 從したがはぬ場合ばあひが  
出で來きませす。且かつ小兒せうにには必かならず從したがはなければならぬ  
大切たいせつの命令めいれいとそうでないのとの區別くわくべつは分わかりませせん  
から 遂つひには必かならず從したがふべきことにも從したがはぬ様やうな事こと  
が起おこります。また勢いきほひ監督者かんとくしやの目めをはなれて自分じぶん  
自由じゆうを働はたらかうとする様やうになりませす。此このうなつてま  
ゐりませすと監督者かんとくしやの方ほうでは「どうも少すくしも目めがは  
なせぬ一寸ちよつと見みずに居ゐると、もうあんな悪わるい事ことをし

て居る」など、思ひまして、益々一分時も目を離さずに監督して居る事の必要を見とめます。そうして眼を光らせ、心を電の如くはたらかせて見はつて居りますから少しの間も心の安らかな穏かな時はありません。斯様なのは決して小兒に取つて楽しい友、愛すべき保護者ではありません。ですから小兒は斯様な人の前では天真爛漫に無邪氣に遊ぶ事は出来ません。従て其人の見て居ない處では其反動として勢不法の事までもふるまひます。斯様になりますと大人も小兒も兩方共おもしろくありませんから其間に眞の教育の出来よう筈はありません。故に或範圍内では小兒の自由を任かせて置いて、そして守らせるべきことは十分厳重に守らせ、監督者が見て居ない處でも守るべきことは守り、してゐる事はせぬ様にしつけて置

いて、或範圍内では小兒を信用して安心して小兒の自由に任かせて置くことの出来る様にしたいたいののでございます。

### 家庭閑話

#### その子

▲豫期に反して樂しみの少きは結婚後の生活なり  
 豫期に反して樂しみの大なるは始めて儲けたる幼兒を育つることなり。

▲家庭を愉快にせん事、何人も願ふ所なれど、さて、結婚前に描きたりし理想の實際に當りては、百分一も現實にせられざるは、誰もく經驗せらるゝ事なるべし。理想の時代には、現實に必らず伴ふもろくの障害を勘定に入れざると、且つ豫

期する空想の餘りに大なるが故なり

▲如何にして家庭を愉快ならしめんか、先づ一家の中より秘密といふことを排除せまし。お父あんに秘密、妻君に秘密、お婆さんに秘密、秘密といふこと既に一の罪惡あり。猜忌之より生じ、邪推之より來り、怨恨嫉妬之より出で、遂に癪すべからざる感情の衝突は、更に大なる罪惡を生むに至らんなり。あはれ 一家の中より總べての秘密を取り去らんには、融然として春の海の如からん。さるにても 何處の臺所にも、忌むべき骸骨のあるは、免れ難き事よ。

▲我國の家庭に入れたきものは、音樂（殊に西洋音樂）等美術の思想、家族向運動（例令ばピンボンの類）善良なる書物の論議など……

▲夫の世に時めくに當りては、あはれ いみじき

二十  
贖夫人よと 世にもてはやされし妻の、夫逝きて後は、一向に凡庸の婦女子と異なることなきを見ることの多きこそゆゝしけれ。

▲聖パウロと呼べる人コリントの人に書を送りて曰く、不信なる夫は妻によりて潔くなり、不信なる妻は夫に由りて潔くなると。

乳母の選み方につきて

原 米 女

●古昔から名を歴史に止めた人には、父母の感化によらないものは尠いのであります、否無位であります。

●有名な露の文豪の、トルストイ伯爵自身は貴族で、あわりなきから、什麼に良き乳母でも、保姆

教師でも尋ねて得られぬことがないのでせうが、伯お二方共、忙しい中から、ことにお子さんの教育に、力を入れなさつて、萬事御自身でなされるさうな。

●して其の田意の周到なることは實に驚く位で、お子さんの教育に就ては決して、他人の差出口等を許されず、またお子さんを漫に他人には交はらしめられないさうな。

●或夜のことであつた、伯は八時頃「ソファ」にお身を横になさつて「ア、漸く我が時間が来た」とおつしやつたと、何と些細のことまでに氣をくばつて居らしやることでせう。

●これはお子さんのお寝みの時が八時だから、それまでの伯御自身の一擧手なりとも一投足もお子さんを誤らしては、いけないと細心注意なさつて

居なさるからで、その注視者たる、お子さん方が皆お寝みなさつたから、さう謂ひなさつたのであらう、なんと敬慕すべきことではありませんか。

●どなたも愛兒の、立身出世を望まると、お方はかくやりたいものであります。

●右の様に、家庭教育とは、直接に教へ込むことばかりでなく、教へず語らざるの間に、以心傳心父母の一擧一動で、愛兒を感化せしめて、其愛兒の徳を養ひ、智識を擴め、品位を高むるものでありますから、世の父たり母たる人は、是非とも愛兒の教育は自身でなさつて頂きたいものです。

●然るに世の中には随分と乳母を置いて、大切な愛兒の教育をそれに任せ放しで、御自分は呑氣に火鉢の前で小説なんかを読んで居らしやる方もあります。



●尤も乳母にお任せになつたのであれば、愛兒はそれに任してもよろしいが、夫ならば其の乳母の行狀や身体を十分と監視せねばならぬのであります。

●然るに世の中には、乳母を見る事が頗る冷淡で乳母が愛兒の手足に傷つくる様な、ひどい不注意さいなさないときは、假令玉の如き愛兒が日々衰弱しやうが、又生涯病身で終らなければならぬやうにならうが、又其精神上道徳上に乳母の心掛がどれ程の影響を與へることにならうが、一向無頓着な方があります、何と間違つた考でありますぬか。

●家事の都合とか、病身の爲めとか種々の事條の爲に乳母を置きます事は致方がない次第でせう。が、置きなざるには、大切なる愛兒を托すること

でありますから、とくと其の乳母とせんとする人の經歷なり、身元なり、又躰格なり、遺傳の有無な事を調べた上でなくては、後でとんだ悔を残すことがあります。

●で、妾は今こゝに乳母を選ぶについての心得べきことを一つ二つ述べて、皆様の御参考になませう、若し一つでも取り所がありますれば望外の幸ひであります。

一、家庭を知ること。申すまでもなく、家庭の感化といふものは大したもので、今度雇ふとする乳母の心性も、幾部それによつて知ることが出来ます。尤も、中には家庭の有様と全く反對な心掛けのものもありませうが、夫はごく／＼少いのです。ですから、先づ其乳母の家庭については、例令ば父母共に實のものであるか、其の性は如何であ

らうか、其兄弟姉妹等の身の上は如何、其生活の度合は如何等は主として調べたいのであります。

二、職業を知ること。これは詮じつめると家庭を知るといふ内に入るでせうが、妾はことにこの項を起しましたのは、其の職業の如何は殊に乳母の心性に大きな關係を持ちまして愛兒の教養に影響することが、最も少くないからであります。例へば、一般に鳥獸の屠殺を業とする人には殘酷なものが多く、園藝などに従事する人の性質は温順な様な譯です。

三、性質の良否を調べること。行爲が不良であれば心性の不良なのは勿論ですが、如何に上手に、奇麗に、しとやかに上部を飾つても、心性不良のものは決して雇入れてはなりません。心性不良な者は、知らず識らずの中に、悪感化を及ぼして

愛兒の天性を害することが、中々甚しいのであります。ですから、傲慢とか卑屈とか若くは嫉妬疑念の心が深いか若しくは、非常に自利的で人の利害を顧みないとかといふ様な性質のものは到底乳母たる資格はありませぬ。

四、感情の厚薄を調べること。勿論情の無いものといつては女子にはありませんが、情の厚いと薄いのとは亦大變愛兒に感化を及ぼすものであります。餘りに感情的だと、所謂愛に溺れて間々、間違のことを致出し、それかといつて餘りに感情の冷かなものは愛兒の取扱ひが如何にも殘酷になります。

五、言語舉動に注意すること。よしや心性は善良であらうとも、言語舉動の正しくないものや乳暴のものを置いてはいけません。又愚圖々々して事

をはきくしないものとか、輕躁のものとか、野鄙のものなどは無論資格外です。幼兒は何事も模倣するもので其乳母の言語舉動は直接に幼兒の言語舉動を左右するものでありますから、敏捷活潑で併も優美のものを求める様にせねばなりません。夫から言語は明了であるか、饒舌ではなからうか、又滯滞しはしないか、吃訥或は野鄙ではなからうか復、訛言はありはしないかといふこと、之等にも十分心を注かねばなりません。

六、躰質に留意すべきこと、躰質の孱弱者又はいろ／＼の遺傳病を持つて居るもの等は是非とも避くべきことは明であります。

七、其の他尙如何様な習慣、癖があるかも取調べねばなりません、それは習慣とか癖とかの中には身の毛も悚つ様な恐るべきものがあります。

例へば怠惰、不潔、粗漏、背約、奢侈、貪婪、放恣、など厭ふべき習慣を持つて居るものもあり又憤怒し易きとか、執拗、滑稽、嘲笑などの様な嫌ふべき癖を持つて居るものもありますからこれ等の點も、とくと注意しなければなりません。

尙十分を望みますと、智識の度合も知り、育兒經驗の有無も取調べ、本人の經歷も深く調べたいのであります。

●以上はたゞ考へ付いたまゝを、順序もなく、消極的方面から觀察して即ち良くない方面のみを記したのであります。併し其の缺點といふものも人常に有り通しのものでありますので、時折に其の缺點なる持病を顯はすのでありますから、さて雇入になるには、こゝに記しました反面の積極的方面即ちよい方からも觀察しなければなりません。

●かく乳母の雇入をなすには並大抵のものではありませぬ。かようにして乳母を雇ひ入れまして、さて雇入れたからには、之れを家族の一人として好く取扱はねばなりません。

小兒の感化

桑田敏子

光子さんは今年四才で入らッしやいました、ついで近いものですからお遊びにお出でるので、私とい近いものですよ。仲好で有りませ、私この頃遊びに参りましたら、茶の間には光子さん一人一人入らッしやいました、私を見るやすぐ、お行儀を正してお遊びを遊はすので、そのマア、かはゆい顔と申しては、私とても筆にはうつつされませぬ、そし

て母さまがお出に成りますと母さまの下へ、ちやんとすはつておいでるので、其の様子は五六才位で。面白い事を時々おッしやつては皆様を、大笑遊はすのです、坊ちやまは七才で、お出でましたのが、やつぱりよいお子でして活潑で入らッしやります、母さまのお出でた時には、お二人で争などはなさらぬそう、實に感じ入りますこれも母さまが平素の教育のよいからで、一つは母さまが御老人方をはじめ、皆様へたいしての行爲によるので。

一 家族不和なる家庭は、人生不幸の極で有ますかゝる家庭に在る人は、顔容正しからずで、言語をはじめ、なす事すること皆々片意地にして、お子方は強情な、そして無邪氣なかはゆい處がないのですそればかりでなく、來客にまで不快の感

を起こさずするで有ります、世にはかゝる家庭かめ  
 づらしやないのですが、ある婦人は申されました  
 一家は主婦の心一つでいかようともなるものと  
 實際そうでしょう、してその奥様はとにかく、老人  
 方はどんなに味氣ない世と罪のない世までをかこ  
 つのでしよう。……それと反して、平和圓滿なる  
 家庭はたえず春風が吹いて、他人までが暖かに感  
 じられます其樂しさはとても私の拙筆には及びま  
 せぬが、皆様にはとくに御承知の事で、そして讀  
 者諸姉にはさぞ御實行の事と、私よろこびま  
 す。

私その日のくるゝまで光子さんと遊びました  
 また〜歸りたくはない程で有りました、實によ  
 いお子はよい家庭でなくては出来ません、そして  
 よい家庭は主婦の心一つで有ります、で婦人た

二十六  
 る以上は婦人たる務を一時も忽諸になさらず、た  
 い一時の感情によりて八ッあたりなどなること  
 は、以ての外で實に可笑しい行爲では有りま  
 せぬか、吾子のよきを望みましたら、婦人の婦人  
 たる道母の母たる務を何より大切に致さなければ  
 成りません事と存じまして。こそ。

富士ちゃんの日記

(明治三十四年十一月生)

會員 某女

明治三十五年七月二十六日。今日は丁度生後九ヶ  
 月なり。「エンコ」オカヤリなどは早くから出来  
 れど、未だ這へず、少しく遅き方ならんか。

二十八日。いつもの通りエンコをして、鼻をスー  
 ン鳴らしながら遊ぶ。日暮頃母に抱かれ、唐紙

に映る自分の影を、バー／＼と言ひ、捕へんとし  
て思ふ様にならず、終に泣き出したり

二十九日。本日始めて二三歩這へり、一週間程前  
から這ふ様の風はなし居たれど、本當に這ひしは  
今日が始めてなり。夕方「エンコ」したまゝゝぬむ  
りをなす、其様子いかにも可笑し。

三十日。夕方湯屋に連れ行きたるに、ねむりなが  
らはある、晝間少しづゝ這ふために非常につかれ  
るものと見ゆ。

八月三日。日曜だから父も朝から家に居られると  
ニコ／＼して色々の藝をして見せる。富士ちゃん  
の藝は、母ちやんの乳をさがし出すことが上手な  
のと、團扇とか、自分の着物の袖などを以て、顔  
をかくし之をのけると一所にバー／＼と言ふこと  
舌をクン／＼鳴すこと、少し機嫌の悪い時は怒る

つもりか、ム／＼と、太き聲にて唸ることなど  
澤山あります。

八月四日。笑ふことも追々上手になつて、人の顔  
を見ると、すぐニコ／＼と笑ふて、愛嬌をふりま  
く、叔父さんが余程好きらしい、子供は亂暴の事  
をするを好むと見え、叔父が抱くと、頭の上へ差  
上げたり、又体操をして見せたりなどするから、  
大變に喜んでとかく叔父さんに抱れたがる。

八月五日。漸く疊一枚位い這ふ様になれり。誰か  
が、富士ちやんは「ドッコイ」など言ふとキツト兩  
手を動しニコ／＼しながら躍る様な風をなす。

夕方食事がすむと、又色々の藝をして遊ぶ、實に  
子供は天真爛漫なるものと皆々打つどひ是れで一  
日の疲れも忘れると共に一時間程かもしろく遊ぶ  
八月六日。錦町の工藤にて、寫眞を撮る、アマリ

能く肥え居たればハダカで寫す。寫真がすみ、一寸母が、油斷なし居るまに「ウンコ」を澤山して其汚れた處を切に手でかきまはして居たには、閉口した。

一週間の献立

某 夕 女

日	晝	鯛鹽燒	鶏肉スープ
月	にまめ	ほうとうにつけ	〔じやかいもあなまんごうにんじん〕
火	せんまい、あげ、(にしめ)	ピフステーキ	
水	くわいにんどん、(にしめ)	ねぎま	
木	はせこぶまよ	とろ汁	
金	はす	さしみ	
土	ばとらみ	牡蠣フライ	

朝は味噌汁と香の物だけなり



小笠原父島の二見港

や て

東京を南に距る海路五百三十哩ばかりの海中に一島がある、即ち小笠原群島の父島なり。此の群島は北緯廿六度卅二分に始まつて廿七度四十三分に終り、東經百四十二度五分から同十六度にわたり、大小九十有七の島嶼相連つて、南北に擴つて居るが、其の面積は全体を合算して、僅かに五方里餘に過ぎないのである。其の住民は千〇十六、四、千六百九十三人である。

此の群島の主なものは父島と母島とで、大さから云へば母島は第一であるが、現在開化の程度や未來有望の点から申せば、父島は確に第一に位するのである。其の理由としては唯父島には此の二見港があるからである。遠く文祿の昔に小笠原貞頼が發見して以來、外民が渡來したのも、八丈島民を移住せしめたのも、皆此の港邊であつた。嘉永六年に米國使節ペルリも、此の港に來り島内を檢案し碇泊地として、當時移住して居つた米人から購つた清瀬の地は、今に尙其の面影を此の港邊に存して居る。今日も横濱を解纜して小笠原群島に至る五百餘海里の長い航海中で、船舶の避難する場所は、房州の館山港を除いては、唯此の二見港ばかりである。大島にも八丈島にも鳥島にも港らしき所は一もないのである。實に南海中唯一の

港である。

四周は山を以て殆んど圓環の如くに取圍まれ、東西廿町南北十町ばかりの大灣で、水は深く最深は廿四五尋、碇泊の箇所多く、一時に十數隻の大船を容るゝ事が出来るのである。港口は西方の一部の開けて居る所で、其の口には小島が横つて居るから、西風も防ぐ事が出来る、故に港内は極めて靜穩である。港の奥の方に二つの岩が並んで居るが、其の形は丁度伊勢の二見石に似て居るから二見岩と云つて居る。此の港の名稱も之に基くのであらふ。

四邊の峰巒には熱帶特有の紅土燃えんばかりに奇麗な色をなし、椰子樹は亭々として聳え、香蕉は婆娑として海風に靡り、海水洋々紺青色をなして、漣波靜かに送るの邊、歸化人の少女は輕装を



して巧みにカノー船を操つて居る有様は、凡て目新らしくて、宛然南洋諸島か布哇にでも来たかと思はれたのであつた。

實に此の港は本島での良港たるばかりでなく、我國有數の港といふべきである、小笠原群島の南海に重きをなす所以は唯此の港の御蔭である。若し此の港がなければ、内地との交通も不便であり、船舶の寄港も絶え、人民の移住も鮮く、開墾の利益もなく、到底今日の如き發達を見る事は出来ないのである。誠に此の港は小笠原群島の生命であり、又我國の南關として、日本民族が南方發展の兵站主地とすべき所である。かく考へて見れば二見港の功徳は千萬無量である、彼のナイル河が埃及文明に關係した事、ミシッピ河が米國致富の大原因である事は、能く人の云ふ所であるが、二見

港の小笠原島に於けるも亦之と同しである。將來此の港を利用して、我國の幸福を増進するには如何にすべきかは、最も興味あり最も必要なる問題である。

自分は此の島に旅行する前は、大洋中に基布して居る小島の事であるから、住民は皆海岸に居る漁夫で、漁船は到る處に澤山あり、節面白さ欸乃の聲は遙かに聞えて、純然たる漁村の光景を呈して居るだるふと想像したのであつた。否自分ばかりでなく誰しも同感だらふと思ふ。然るに事實は全く之と反對で、漁村ではなくて皆農村である、冒險的の漁夫でなくて平和なる農夫である、島内到處開墾せられて今や餘地はないのである。而して其の沿岸には僅少の小舟とカノー船とがあるばかりで、漁夫も漁船も殆んど見當らないと云つ

でも差支ない、まして欸乃も聞えず、漁火も見えないのである。一夜友人と海岸に歩みて港内の夜景を見渡した事があつたが、此の廣き港内は暗に閉ざされて、碇泊中の兵庫丸（自分等の乗つていつた船）と的矢丸（南鳥嶋の事業家水谷新六氏持船）との船燈が、漸く宵の明星の如くに輝いて居るばかり、四方寂寞にして、何物も其の幽靜を破ぶるものがなかつた。二見港邊に於てすら此の如くである、其の他の島に於ての様子は想像するにあまりあるのである。此の太平洋中の孤島に於てかゝる有様は喜ぶべきであらうか。

今や小笠原群島には、甘蔗は野に徧ねくして、其の産額は殆んど九万圓、鳳梨樹は山に満ちて其の額四千六百圓、庭園を飾る香蕉は九千五百圓、海風に櫛る林投樹は其の葉の編物は一万二千二百

圓。其の他に甜橙あり、櫻櫚あり、檸檬あり、マニラあつて、共に幾分の産額はあるが實に僅かである。思ふに小笠原群島の價値は此等の産出地たる故でない、唯茫々たる大洋の中心に位置して、遠洋漁業のステーションたるにあるのである、南洋經營の根據地たるにあるのである。尙換言すれば幾十の群島其のものにあるのでなくて、此の四方山に圍まれて水深く浪靜に、船舶の休養に適當なる二見港の存在にあるのである。然るに此の港の現在は前述の通りである。

自分は彼の島へ旅行の時に、横濱から彼の島に居る歸化人と同船したが、其の話を聞けば彼等は臘虎船に雇はれて北海に行つた歸途であつたのである。此の港へは我金華山沖から北は千島、堪察加半島の沿海を徘徊して、鯨や臘虎の密獵をなす

船舶が、薪炭や飲料や蔬菜の買入をしたり、又獵夫の雇入れの爲めに、年々來るものが十數隻もある、此の歸化人等も毎年雇はれて行くのであるが、其の中の一人なるローベー氏の如きは、餘程の貯蓄もあつて、小學校の基本金も主に此人の寄附金から成つて居るといふ事であつた。

遠い北米から大洋を航して同港に寄泊し、同島の歸化人を雇入れて漁獵に従事し、唯だ其の鯨油をとるのみでさへ、尙ほ夥多の利益があるのであるから、若し邦人が同島を根據として、此等の歸化人を案内にして、事を始めたらば、利益が更に多い事は理の當然である。事業勃興し漁船は朝に二見港を出で、夕に二見港に歸り、捕獲せし鯨類は此處で解剖し、採油し、罐詰にする様にならば、今や耕作の餘地なく、衣食に困しむ島民も、新な

る職業を得て、港邊を繞る各村落も、大に其の面目を改むるのであると思ふ。近時二三の有志者に見る所あつて、一の捕鯨會社創立を企て、居ると聞いたが、どうか一日も早く成立させたいものである。

港邊には西北に大村あり、東北に奥村、東南に扇村があつて、小笠原群島の粹は此の港邊に萃まつて居るのである。

(つゞく)

動ぎなき御代の光はてり渡る

萬頃一碧太平の洋

(牧羊)

## 史傳



エドワード、デロング（承前）

米 溪

落ち付きたる態度に、一糸亂れざる應答振、無邪氣なる内に、凜として、犯すべからざる風を備へ、言葉さへ奇麗に、清き心の流れを酌めるなど同じ年頃の兒童の、いと、人手に餘るものも多かるに想ひ比へては、一入、心も動かされて、母同胞の上なども想ひ装へらるゝに、ハリスもひたすら感に堪へで。

「斯程迄の訓育を垂るゝ母を持てるとは、切も幸福の極みよ。將た、之程迄に、清き誠心持てる

少年を、我が子として、育つる人の、宿世も思はるゝぞかし。あはれ、克く母に事へよ。温かなる、愛の懷に慈まれて、誠の教を受くる身は、努め、其の教に背くまじきぞ。慈母の教は應て、身の光となりて、前途を照すべきに、夙に、夜に、教のまゝに怠らで、己か榮譽を擔ふと共に、老い行く母の行く末に、杖とも、柱とも、頼まるゝ、其身の光りに、母の笑顔を迎へよかし。

「あらッ！」

露もつ眼を抑へ取へず、稍、頭を擡けて、面映げに、又、伏目になりツ、答へぬ。

「母は既に逝りぬ。病の床に在りてより、吾れなくば安せられず、幾十日の病氣は、老い行く秋と共に、次第に心細くなりて、遂に、黄泉の客

となりしかば、野邊の送りも身一つに、書物の事も心に掛れど、夫れや是れやに、月日を過ぎぬ。

「御身の名は何と云ふか、

「エドワード、デロング！」

「定めし、父上は家に在さん、

「否とよ、父は蚤く、吾か稚き頃に逝りて、母の手一つに成人ぬ。

「何處に住へるか。

「此處より殆んど五十哩許りなる、ラインウードの街に、！

「好し、さらば、曩日求めしは何の書なるか、

「讀本と、ラテン語の字典なり。

「領取證…其の間違たる…とは如何。

「聽て、少年のポケットより取り出でしを見るに

主管のモルレーの印あり。之れ、前さに店頭にありて、少年と推問答せしものなれば、ハリス獨り首肯しツ。

「一寸此處へ、モルレー！」

折ふし、客の出入繁きに、主管等は孰れも、其の預かれる所に執筆し、モルレー亦、隣室に在りて、顧客に應接しなから、腰を屈め、笑を湛へ、小心翼翼、左右を顧聘して、忙はしげに振舞へりしかば、ハリスは更に膝を進めつ、又デロングに語を續けぬ。

「エドワード！、御身の言ふ所、誠に理りわれは最早、決して、其の行に對して報酬とは云はざるべし。さりながら、又、別に、望む所もあり。斯かる行に對して、予の心の感に堪へたる志を表白することを否まであれ。之れ、聽て

御身に、其の別れたる母より受けて、志高く、勝れたる教を、末長く心に銘せんことを、望むこそ………

其處の、書架の内より、圖書拾部を採れ、其は、既に購へる外、更に撰べ、欲する所は撰んに任せて。今日の贈り物とせん。あはれ、今後に於ても、常に、今の如くあれ。深く記せよ。努、忘れされ。微細なるものなりとも、己か誠心を欺かざれ。小を忽にせざれ。微を侮らざれ。御身の母は、徳高く、清く、御身を教へたることを記せよ。若し、將た、事を謀らんとて、朋を思ふときは訪へ、誓つて、御身を助くべし、予は御身の朋たらん！

父を喪ひ、母に別れ、いとさへ、感情の動き易さに、今、此の親しく、懇ろなる詞を聴きては

獨り涙の止め敢へぬのみにあらず。デロングは、やがて、其の誠心置れる贈り物を謝し、感謝の詞も、濕び勝にて、一揖、堰き敢へぬ涙を袖に拂ひて、店を辭しぬ。

日は、はや傾きて、曇りたる空の景色、雲にや雪にや、風は襟元を掠めて、往き來の人の足も急かはしげなる間を縫ふて、深き情心を包める贈物抱へなから、歸る家路に、孤燈影暗き頃、母の俤今は臆にだに見ること叶はず、今日の應答に、一入、慕かしさの勝る過ぎにし夢の迹辿りて、今宵の、わが家を想ひ見る時、果して、如何なる感想をや、小ざさ胸に宿すらん。

(未完)



女五首

文苑

佐々木信綱

老女

とつぎたる都の孫にあひがてら

上野とやらの花を眺めむ

工女

つかれたる工女のむれのゆきすきて

堀はた寒きさ夜あらし哉

漁婦

かつを船歸る渚の薄月夜

何れ我背の舟にかあるらん

伯母君

はつもの、峯のさわらび<sup>つと</sup>土産にして

伯母君ましぬ桃さける朝<sup>あした</sup>

少女

舞扇半ひらきては、えめる

おもわうつくし花の下かけ

吾孀の歌

た、き、生

あな、かみつよに

しこのしこくさ

やまとたけるの

みこはしづしづ

うすひのみねに

ひがしのかたを

いづのふなぢに

さかまくなみの

千ひろのそのの

なかきおもひに

ひめのみさほを

わがつまはやと

あらぶれし

うちきはめ

みなにます

かへるとに

たちたまひ

みたまひき」

かせわれて

うなばらや

もくずばら

かくろひし

おもひでに

のたまひき」

みことのよくに  
あづまのそらや  
ひがしをとなひて  
かのたちばなの  
そのみこゝろの  
みさほのはどこそ

つたはりて  
あづまぢと  
かぐはしき  
ひめぎみが  
あさからぬ  
おもひやれ

御代ほぎ

光あまねき 朝日かげ  
玉しく庭も 賤が家も  
おなじ恵に てらされて  
ともに樂しき 御代なれや

朝日照り添ふ 浦安の  
國も靜かに 治まりて  
外國人も 日の丸の  
旗を立てぞ 祝ふなり

つねを

若き人のわづらひ

小林 兩峰

若き人ありけり、その人の面白く、其の人の  
姿、楚々たりき、言清くすきいりて、高潮の  
すぎゆくが如し、其の人、想に沈みて悲みに  
かなしみて、なげきぬ、星の遠きみ空にくた  
る夕、かくわれにものかたりしかば、そのま  
ゝ、かきしるしぬ、

若き人の心の奥にかよふ氣はやはらかなり、そ  
の心をめぐりて流るゝ血は桃色にしてかぐはし、  
若き身にかよふ血まことにやはらかなれば、そ  
の熱さを限りなし、されば一たび其のやはさ、あ  
つさ若き身のそれに觸れば、身に秘めたる緒琴は  
ひびきをつたへて、野の白百合、かすけき曙のけ  
あひも、かよぶべくもあらぬかし、



この若人たては、そこには、若き人の世あり、  
 しかも樂けなる世は花咲き亂れたる花壇のそれに  
 向ふか如く、光れる星のきらめき渡れる大空の高  
 さに對するその如くも見ゆ、

かくてこの若き人のたてるあたりには、一たびか  
 なづる箏琴の響に耳かたむくる人は、あらゆる感  
 情は惹起され、或ひは愛ひて悲みに沈み、あるは  
 花やかに樂しく快よくせられ、而かもそのうちに  
 光明を仰ぐとすら得らるゝとぞさく、

この若き人は、或時野末に立ち出て、仰きては  
 俯し、俯しては仰きつ、かの一條の小徑のかたな  
 る若草をは眺め入しに、草の勾ひの高き、青き其  
 色のたえなる、いたくもこゝろ動かされぬ、

若き人の情には、そののみならず、ふかくもさら  
 に感しいりぬ、目に入りしもの耳に觸しもの、蝶

に薫に、百囀りの群鳥、何れも感起さしめぬ、そ  
 は、かゝるものに對して、現の相よ、現の形あゝこ  
 は眞の姿にはあらずと、

小ざき花片何處ともなく、軽く舞來りてわかき  
 人の前に散りぬ、若き人はそを軽く手にとりて、  
 接吻しつ、可愛き花片よ、汝のかくには秘めたる  
 廣さ不滅の宮の鎖され居るに、人はその奥深き宮  
 居の扉開かんとせざるとの哀なるをよ、

不滅の生命こそげに、眞の姿とは云ふなるべき  
 に、世にありて見るべきことの多き、聞くべきと  
 の澤なる、思ふべきを憂ふべきとある、そは不  
 滅の生命の理の表はれし姿のそれなるに、世の人  
 は影のみを提へんと焦慮つゝあり、何にとてかく  
 も淺ましきぞ、

野に咲ける春の花くさくにして、うつくしと

のみ愛づる世の人、色彩のみみて、何を笑むなるか、色彩の外に秘めたる精神を深く眺めざる、色彩を解き剖きて、たい美しとのみ感ずるは眞に心あるものゝ爲すべきをかは、

若き人、更らに俯むさまた口を開きて謂けらく、琥珀の光れる御殿にこそ、花の色もまたき姿はあるなれ、そこには世の人の希なる樂しみなく、厭ひ捨つべき憂きと歎くべきと露あるなきを、

彼處にはものゝ面みなてりはひて、光明あり、「日輪の凍水を溶かすが如く、あらゆる不平等を溶かす」べき愛の深き衣褰は白く、紫の色なしてゆるやかに薫ほりをあたりて散しぬ、欄干のあなたにありきゆくとき、紫藤、ゆかりの色なして

水の面に映ふにもまして、いとつや／＼し、

若き人は瞑目しつゝ、胸の中何やら別に天地の

開けさるものありたらんが如く、歩を進めて、やかて、彼方を指し、

光りし星影の黒なりて、ゆるやかなりし、潮路狂ひ馳せ、嚴平き巖角に船を擡ぐ磯邊にたてるおのが家、おもはるゝに、嘗つてはわが母、おのが子の世に出て、たよりなき黄雲のされ／＼となりしこたくふべくつれなくなりしを啣ちむひかの金星の光り一つ閃きわたる夕門の戸に倚りそひて、わが子のいま冷き磯の上に凍れる石を枕として寝ぬるらんを思ひ玉ふにと心に浮び來るるとき、われはひたぶるに、先の如き思は亂れそめぬ、

若き人思に沈みぬ、

現相のかきりなき束縛をさりて、永劫のうちなる實の相のうちにはたぢはるゝを得んにはいかにかすべき、花の一片はわれに教へを授けしに、

かくもわれはまた思亂れんには、いかにして、わが心の歸趣を定めて、流れのあなたに掉し、眞の岸にゆかんはいかにかせん、

あゝわれはしらし、あゝわれはしらし、あゝ暗き谷間向ひの山の頂にゆかばいかに、

怕しき猛き獸の吼ゆる音、谷間にひびきて、われを襲はんか、われはかくて、いかにすべき、雲に似たるわが、わずらい、拂へどもきたりて、避けえし、……………

若き人は花片を抱いて、泣きふしぬ、

お年玉

(前號の續)  
金田みず子

菊子は何時にも無い清々とした美しい眼貌で、雪ちやんの爲に拵て置いた、件の針箱を兩手に持つて、

出て來ました。

此を雪ちやんの側に置ながら、「此は私のお年玉ですよ、もつと良物なら好んですけれどもねー」

「アラマー、好針箱ですことー、お婆さん、本當に私にくださるの？」

「誰も外の人に遣るんじやないんですよ、雪ちやんに上るつて拵いて置いたんですものー、」

雪ちやんの眼の中に輝いて居た涙の粒は、此時消へ去つて、兩方の頬に鬻か二つ現れました。

雪ちやんは、此針箱の抽斗を上からだんく下へ開けて、見て行きました、此度は抽斗を皆引抜

てしまつて、中に入つて居る品を一つ一つ炬燵の蒲團の上へ並べながら、

「此はお婆さんのお衣裳の切ですか、奇麗ですことー、」

「其は私が若い盛な時分に拵いた衣裳の切ですもの。其を拵いた時分は、旦那が盛で飛ぶ鳥も落とす云ふ様な威勢で、お金は澤山あつたし、これと云ふ不自由な事は無かつたのでしたがねー、どしてマーこんなになに貧乏したんだろーと、心丈夫の菊子にも似合ぬ愚痴らしい事を言ひ出したのを雪ちやんは遮つて、

「お婆さん、妙なねー、此んな所に切か貼つてありますね、一寸ご覧なさい、此處を………」と、一番下の抽斗の底に貼つてある切を菊子に見せました。そこで菊子は、其は妙だといわん許りに、頸を傾け眉毛の間に皺を集めて、其の中を覗こまうとしますと、

「アラお婆さん、一寸お待ちなさいな、何か書てありますわ、」と、雪ちやんが叫んだので、

菊子の胸には、奇怪な感がしたのか、急に動悸が打ち始めました。

「二階に懸つて居る額の後を見よ」と、雪ちやんが讀み始めた時には、菊子の心臓は烈しく其の循環を始めました。其は旦那の書置だといふ事に氣が付たからでしよー。

二階に懸つて居る額の後には、全体何んな不思議なものがあるのかしらー、とれ一つ行つて見よー、と菊子の胸の血は益々騒ぎました。

頓菊子は二階へ上つて行き、元、旦那が書劑にして置いた室へ入りました。此は此の家での上等な室なので、先南向の床の間には、支那の賢人、李白と云ふ人が飄を提げて、何千丈となく高い瀑布を見上げて居る、大きな掛軸が懸つて居り、又た其の前には黒塗の机が一つ、桐の樹の本箱が五つ程並

んで居りました。然し其は皆空でありました。其の外柵や戸柵も亦虚でありました——其は旦那の書物や器械で一坏であつたのですけれども、旦那の遺言で、〇〇女學校の圖書館へ寄附してしまつたからでありませう。

其から此部屋の中で最も際立つて目に付くものは、東の壁に懸つて居る、三尺許のお釋迦様の額と、其の向ひの壁に懸つて居る、やはり前と同位の基督の肖像でありました。

菊子はお釋迦様の額を取下さうとして手を伸ばしましたが届きません、そこで雪ちやんに頼んで踏臺を持って来て貰ひまして、漸く其の上に昇つて額に手が届く事になりました。今や額は菊子の手に依つて捧られよとする機會、餘重かつたのか、此の大きな額は手から外れて、下へバターと墜ち、

其が爲、額の後の板は割れました。

三

「アラお婆さん、板がこんなに割れましたわ！」と云ひながら雪ちやんは、此板をソーツと持上ますと、下には大きな白い厚い紙が、額一杯になつてありました、雪ちやんは又ソーツと此紙を持上ますと、驚くべし!! 此處に、紙幣が貼つてある様に、澤山並べてありました。

此を見た菊子は、驚いて暫時言もなく、悄然イザんで居りました。此の時菊子の目には、數滴の涙が正に落ちんとして居りました。其は良人がこんな大枚なお金を自分の爲に遺して置いて呉れた親切が、深く情にしみたからでしよ。菊子はその場に座り、額に兩手を合せて俯きました。其は冥土に御座る良人に、誠心誠意からの感謝したのであり

ましたる。

「お婆さん、お婆さん、あの向の額の後には何にも無いんですか、何か未だあるんじゃないやーありませんか。私が見ますよ、好いんですか、」と雪ちゃんが踏臺を運ぶ物音に、菊子はつと氣がつき、

「アー、そーだつたねー、忘れて居ましたの、雪ちゃん、見てくださいな、」と言を云ひ終らぬ中に、雪ちゃんはクリストの額の後を覗込み、

「アラお婆さん、妙な物が下つて居ますよ、小さな瓶の様なものが、額の後に……」と云ひながら、瓶の吊してある紐を解きました、それから其を下さうとしますと、小さな割合に重たかつたので、雪ちゃんの片手にはとてもさへへられないで、下へトーンと落ちました。而して蓋は取れて、中からコロコロと四方へ金貨が轉り出しました。

お金が出たのは此が始めてでは無いから左様驚はしなかつたが、金貨が出たのには、菊子は夢かと許驚きました。

菊子が斯様に大盡になつたので、雪ちゃんは心密に思ひますには、「モーお婆さんはとても私見た様なものを相手にしては被下るまい、此のお婆さんに棄てられ、ばモー私を可愛がつて呉る人は一人も居ない、せめて母さん一人でも居たら……、ア、又家のお叔母さんにお飯の焼方が悪いのお汁の鹽がからいのと小言を云はれ、雑巾のかけ方が下手だと云つては叱られるのか、どして私はこんなにいじめられるのだろー」と身の成行を考へ出して、急に胸が一杯になつて、涙も出ず、恨しそーにジーツと菊子の顔を凝視して居りました。

流石菊子は年老て居るだけに、チャンと雪ちゃん

の情の中を見抜きまして、

「何を雪ちやんは考へて居らつしやるの？ 何も悲しい事なんぞは有やしませんよ。あの階下へ行つて、花ちやんから戴いた、赤い巾着を持つてゐらっしゃいな、」と云はれて雪ちやんは下へ行、頓其を持って上へ來まして此を菊子に渡すすと、菊子は中へ金貨を一杯つめて、之を雪ちやんの前に差出し、

「サー此が私の本當のお年玉ですよ、どれ程私はお錢を入れて上げたいと、先頃から思つて居つたのか知れなかつたのですけれども、お錢が無かつたものだから……。サー上ますよ。此は良い巾着だから、お婆さんが大切にしてお置きなさい、用に立つ事もあるからと、云つて置たが、本當に用に立つ事になりました。好かつたねー、サー上ますよ、手を出して………」と菊子にゆわれまし

たが、雪ちやんは手も出さないし、又貰はうとする様子もなく、

「私戴きませんわ、其お金はお婆さんのお旦那さんが、お婆さんに上るつて仕舞つてお置なすつたのですもー、私が戴いては悪いでしよー」と言ひ張るので、菊子も大いに持餘し、

「だつて、私が上るのだから好いでしよー、お旦那さんが上るのじやーない、お旦那さんから戴いたのを、私が雪ちやんに上るので、そんなら好でしよー？」

「だつて、私そんなお金なんか持て居ると、何處から持つて來た、盗すんででも來たんだろー、なんて家の叔母さんに言はれますもの……」

「その時は、松田のお婆さんに戴いたので、私そーお云ひなさいな。それでもいかなければ、私

が一所に行つて、譯を話して上たら良、でしよ？、サー取つてお置きなさいな、と薦められて、雪ちやんは止を得ず受取ましたが、實は貰つて好、ものか、悪いものか、判談がつかませんから、唯お禮も何にも云はず、手に巾着を握つた許りで、悄然と立つて居りました。

「アノ私は雪ちやんにお頼が有るのですが、聽いてはくださるまいか」

「エー、お婆さんの頼なら、私、何んでも成ますわ、何んでも……」と雪ちやんは言に力を入れて云ひ放ちましたが、其は確に情の底から沸き出して、口から溢出た所のものでありましょー。

「雪ちやんは私の娘になつては被下るまいか」と以外の要求に、暫時雪ちやんは呆然して居りました。見る／＼雪ちやんの頬は朝日に輝く赤い蓋薇

の様に成りまして、可愛らしい唇から次の様な言が響き出しました。

「お婆さんの娘になれるなら、私何も入用ませんわ、此んな嬉しい事は有りません……」。

松田秀雄の家は元來小じんまりとして奇麗でありました上に、此頃壁も新しくなり、畳替は出来、唐紙障子の紙は皆新しくなつて、此家許へお正月が来た様でありました。

太織縞の羽織に、燃る様な赤い袴を穿き、赤いシヨールを懸けて手に書物包と辨當箱を持つた可愛らしい一人の娘の子が、午後三時十分頃、菊子の家へ入つて行きまして、坐敷に上るや、書物を持つたま、お母様、只今……と右の手を付て、頭を下げましたのを私は見ました。此の娘の子は誰でありましょー？、（おはり）





# 説林

讀書に付きて

牧羊

アイザック、ワッツといふ人は、智識收得の五大方法として、次の五つを擧げた。

- 観察によること
- 讀書によること
- 演説によること
- 會話によること
- 考慮によること

吾人は茲に、此凡べてを説くの暇がないからして此中の一つ即讀書といふことに付きて、多少述べて見たいと思ふのである。

一體日本人は讀書には餘り興味を持たない様  
思ふ。一寸した例ではあるが、汽車の中でも、外  
國人などの多数は大抵書物を見て居る、日本人で  
あると、先づ外を眺めて外界の觀察でもして居る  
のは寧ろ上の部で、大抵は茫然として居る、否ら  
ずば居眠りをして居るのが多い彼は暇さへあれば  
讀書する、我は暇があると茫然として居る、送り  
物に書物を使ふことなどは彼國では、最も普通の  
様であるが、我國では頓としない、シルレルの全  
集は嫁入道具の缺くべからざる一つとなつて居ると  
いふ位、彼國では婦人であつても讀書の趣味が發  
達して居る、勿論種々の點から之は觀察しなけれ

ばならないが、兎に角我國では讀書の趣味が一般に少いことは明かである。

そこで第一番に

### 一、讀書の利益

から書き始めようと思ふ

(1) 書籍を讀むことによりて吾々は、國の遠近を問はず、現代及過去に於ける人々と自由に交際して、其思想なり事績なりを、最も廣く知り得ることが出来る、つまり讀書によりて吾人は人類の所有方面から何か知らん學ぶことが出来るのである。他の方法例令ば觀察などであると、一切自力で學ぶので、其知識も亦自分で觀察され得る範圍に止まるものである、人と談話することも吾人の智識を得る必要な方法に違ないが、さりながら、一所に談話をする所の人の數も亦まことに少數といはね

ばならぬ。即ち共に語る人といは、先づ自分と時を全うし所を全うする人でなくてはならぬ。又自ら物事を考慮することは勿論必要に違はないが、自分で考へるだけでは、得る所の智識の範圍といふものは實に狭少なものだといはねばならぬ。尙且つ所謂下手な考休むに似たりで、足らぬ智力で以て獨りで考へた所が、其結果はつまり休んだのと同じことで、併も得る所なくして終るとが、屢々ある。そこへ以て一道の光明直ちに暗黒界を照らして向ふ所を指導し呉れるものは、實に書籍の賜である。

(2) 次に讀書に依りて吾人は、各國各時代の人々の思想行爲を知るのみならず、實に人類中の最も博識なる、最も賢明なる最も善良なる人々の智識思想を收得することが出来る。勿論多數の出版物の

ことであり、殊に今日の如く汗牛充棟も蓄ならぬほど、書物が出版せらるゝことであるからして、其中には尤で平凡な、偏見な人の手になつて、讀んで秋毫の利益のないのみならず反つて幾多の有害な影響を與へる様なもののあることは疑ふべからざることであるけれども、然も其中の善良なものであつて、世界の名譽を荷つて居る書物は、各國各時代に於ける、最も偉大賢明なる人士の精神的産物である、座らにして、此の如き人士の思想感情智識を收得することの出来る方法は、讀書を措いて果して他に如何なる方法あるべきか。

(3)のみならず 善良なる書物を讀むことは、彼の最も偉大賢明なる人士の精神的産物中でも、殊に最良なる、殊に琢磨されたる、殊に刻苦して出来た所の思想に接することが出来るのである。何と

なれば、善良な書籍といふものは、畢竟此の如き名士の苦心慘憺たる長日月の勉強と經驗との結果を書いたもの、其最も成熟した思想を書き下したものであるからである、演説とか、談話とかであつて見ると例令名士であるにした所が、矢張同時代の人に限られるし、且つ又其考や思想といふものも其人の其時の考によるとが多いものである。

(4)次に讀書によりて得る所の智識は、屢之を復習することの便利がある。一旦讀んで得た所の事柄は吾人の勝手な時に於て、其書物を何處でも繰り返し、繰り擴げて讀むことが出来る、従つて其智識を何時までも消失させないで保存し得ることが出来る談話とか、演説とかであると、大抵は日月の経過とともに、聞いた智識は薄らいで行くとか普通である。尤も吾人は有益な演説とか談話

とかを聞いた時には必らず、其要點を筆記して置いて、忘れても夫を出して又思ひ出す様にすると、最も必要なことと考へて居るが、時としては、左る時間がない爲めに、幾多有益な智識を一時限りとして、消失せしめる場合が甚だ多いのである。(5)次に讀書によりて智識を得ることは、其他に比較して最も便利な煩のない方法である。自分獨りで觀察し考慮すると同じ様に、相手が要らない。即ち他人を待たないで、自分の勝手な時、處に於て讀むことが出来る、相手の感情を害するや否やと云ふ苦心も要らなければ、相手に向つて腹を立てる必要もない。だから、世の中を見捨てた人などは、遠く退いて獨り圖書を左右にして悠々として自ら楽しんで居る、即ち少しも他から牽制せらるゝことがなくつて、然かも高尚な眞理の巷に遊

ぶことの出来るのは獨り善良な書籍の賜ばかりではあるまいか。

まだく永たらしく、形容澤山に并べ立てようものならば、とてもこゝに僅々の頁數では書さ盡すことが出来ないと思ふから、讀書の利益といふ點は茲で擱事することにする。

だが、これは讀書の利益といふ點のみを擧げたので、無論之等の利益を得んとするには、幾多の注意を要する。でない、之等の利益を得ることが出来ないのみならず、反對に讀書の弊害を見ることになるかも知れない。

ことに、現今の時代の様に印刷物の濫出する時に當つては、一段讀書の注意が必要である。だから次には一步を進めて其要點に向つて書さ及ばさうと思ふ。



雜

録

きんらぎと其の異名

せく 生

●●●●●  
きんらぎは二月の和名である。古事記、書紀、萬葉集など、ごく／＼むかしの事を語つたり、歌つたりした古い書物にも、皆その通り、きんらぎと書いてある、夫故に歌よみなどは、昔から二月とは詠まないで、この和名ばかり用ゐたのである。

風さむみまだきんらぎの山の端に

かすむとみえて雪のふりつ。(衣笠内大臣)

さは姫の空に霞の衣更着や

ながき日影も此の月ぞしる。(顯昭法師)

清輔朝臣は早く其の語の意味を考へて、「二月さ

むくて、更に衣をされば、きぬさらさ」と云ふを、

あやまれるなり。」と言つた。それから誰でも、

其の外には考へる人も無かつたのが、跡部光海翁

は之と少々異なる説を立て、「二月をきんらぎと

いふは陽氣が更に來る故、氣更來にて、陽氣の發

達するをいふのだ」と言つた。この外二つ三つ之

と異なる説もあるが、何れも取るに足らないから、

今は言はない方がよいと思ふ。

夫故まづ二月は(1)未だ寒さも去り兼ねて、衣を

更に衣るといふ意と、(2)時氣更に來るといふ意と

の兩義である。併し之は時氣更に來る故に、餘寒

の結果として衣を更に衣るといふ事となるからは  
 同一の事實より、此のことは出でしものと考へ  
 らる。されどさざらぎの語原が果してそれか、否  
 か疑なきものでもなく、畢竟これといつて動かな  
 い語原は實にわからないから、只古い説をあげた  
 ばかりで、次にはこの月の異名として、歌はれた  
 ものをしるす事とする。

ひめつさ月 (紀友則)

鶯のかよはぬさとのやどはあらじ  
 花さかりなるひめつさ月

雪消月 (俊頼朝臣)

年越えて春こそみえず富士のねの  
 雪ささえ月のころもふれ、ば

梅津月 (公)

大空のふとやしるらん梅津月

梅見月 (有家朝臣)

とふ人もなき故郷の梅み月

風かぜのなさを袖そでにしるかな

小草生月

緑みどりなるけに色いろあさし小草生

月つきまちえたるむさしの、原はら

服装の事 (下)

彌 生 譯

服装ふくさうの美ひは童たごに外觀がいけんの装さうたるに止とどまらず、猶なほまた又  
 世よに立ち、事ことを成なすに當あたて、大おほに、其そのの成せい功こうの輔すけ  
 となることは疑うたがふべからざるの事實じじつなり。人ひと、試しらみ  
 に、清せい楚そなる衣服いふくを着きくる時とき、其その感かん果くわして如何いかな  
 るかを思おもへ。必かなずや、其その感かん化わ深ふかく内部ないぶに通つうして

心中一種の美感の生ずることを知るべし。而かも其の感覺は、手裡指頭の間に波及して、従て、日常とるところの業務の上に顯るゝことを免れざるべし。何となれば、人々、日常の行動は、其の感覺思念の結果たるや論なければなり、衣服の人に及ぼす感化の著しきは、吾人の晴衣を着けたる時と、平服の時との心地の全く一變するにても知らるべし。然れど、世人は年少、未だ家を成さず、収入亦少く青年者に向て、寸時も時流に倣れざれとは望まざるべし。彼等は、但だ、汝等の清楚なる服飾を喜ぶなり。總べて、容儀の端正、服装の清秀なるは、大に、人の注意を惹くものなり。されば、毫も服飾に意を用ひず、常に、垢じみたる見苦しき衣服を纏へる者と、日常、清楚なる服装をなし、端正なる容儀を保つの人と、孰れか信ず

べきやといはい、何人も、後者の信頼すべきを知るべし。清秀優美の面目を引くと同時に、醜陋劣悪なるもの、擯斥せらるゝは、是れ、素より、自然の數なればなり。

服飾中、最も意を用ひざるべからざるは、襯衣の類なり。垢じみたる襯衣を着し、見苦しき、カラ、カフスを着くるは、如何なる口實を以てするとも其の非を被ふこと能はざるべし。何となれば、一箇の石鹼、數片の曹達、價數錢に過ぎざれば、如何なる人も、之を購ふこと能はざる筈なく、又、人に托して、洗はしむとも、其の費知るべし、而も、其の費に堪はずといふ人あらざるべければなり。襯衣下衣などの清潔なるは最も多く、其人の容儀に關するものにして、假令、上着は、着古したるを纏ふとも、襯衣、下着にして、極めて、清

鮮ならんには、人に接して、嫌忌せらるゝこと少  
 きものなり。人の世に出で、成功すると否とは  
 全く服装の如何に因るとはいはず。然れど、荷も  
 身を立て家を興さんとするものは、必ず、服装に  
 意を用ひよといふなり。是れ、予が、數多の實例  
 に徴して、其の重んずべきを確認し、切に、青年  
 諸士に勸むるところなり。収入の幾部分を服飾に  
 費してよきや其は、人々の境遇によりて、各差あ  
 れば、元より一定すること難し。予は、但だ、其  
 の身分に應じて、出來得る丈の服飾をなさんこ  
 とを勸告するなり。即ち、驕奢に失せず、醜惡に  
 陥らざることこれなり、凡べて、老少男女を問は  
 ず、各其の容儀外貌を修むる爲めに、費したるも  
 のは、決して無益の費にはあらざるなり。但だ、  
 人々は能く注意して、身分不相應に流れざること

を心掛くべし、驕奢の傾向は、其人の收入如何に  
 拘らず、決して、善き事には非らず、驕奢は、如  
 何なる場合に於ても、浪費たるを免れざればなり。  
 然れど、又、餘りに儉約に失するも好まじき事に  
 ならず、要は、唯能く、心して、可成、清楚なる  
 外觀を保つべきなり。本年、流行して、來年に至り  
 て、襪物となるが如き極端なる時流を追ふは、青年  
 者の、最も戒めざるべからざるものにて、衣服、  
 靴などは、必ず、色澤形容の穩和にして、華美な  
 らざるを擇ぶを善しとす。是れ、一時の流行に止  
 まらずして、永遠に續くものなればなり、世の所  
 謂、シャイ者と稱するもの、多くは新奇を衒ふの  
 極、奇矯なる服飾を喜びて、或は、非常に長き上  
 衣を纏ひ、或は、極めて太き洋袴を穿ち、或は、  
 故らに靴の先を四角になし、或は又、煽ゆるが如



き緋色の襦衣を着くるものあり。是れ皆其の嗜好の野卑なるを標榜して、自らを卑くするに過ぎず、而かも、彼輩揚々として、之れを人に示し、以て、竊かに、榮となす、嗤ふべきの至りならずや、社會に信用を博し、世人の尊重を得、依て以て、身を立て、家を興さんとする前途有爲の青年諸士、豈、彼等の擧に倣ふて可ならんや

霞と霧

摩訶生

既に蒸氣として昇騰したる水は、無色透明にして空氣中に存在し、殊に多量となるに従ひ、益空氣の透明を助けて、茲に硝子製の天地を吾人の眼前に現出し、屈折の理によりて、吾人は遠方の森林山野等を異常に極めて明瞭に認むるを得るに至

る、俗に雨の前徴となせる場合即ち之なり。

されど一旦空氣中の温度の少しく低下するとあらむか、忽ち飽和點を下りて、直に多少の不透明

を來すなり、いふまでもなく水蒸氣の還元せられ

し第一歩なり。

○等しく水蒸氣の還元なり、滴化なり、されど、

花鳥の色にも音にも先だちて

時知るものは、霞なりけり、  
尊長親王

三芳野の山も霞みて白雪の

ふりにし里に春は來にけり

一讀すれば、悠長の感自から起り、

狩衣すそ野の霧は晴れにけり

尾花が袖に露をのこして、  
宗秀

秋霧のたつを煙とみしほどに

山の木葉も色づきにけり。  
人丸

唱し來れば、清冷の趣自からその中に生ず。

他なし、前者は主として春に歌はれ、後者は概して秋に吟ぜられしが故のみ。

○等しく水蒸氣の滴化なり、還元なれど、

見渡せば春日の野邊に霞たち、

咲きにはへるは櫻ばなかも、

人とはい知らずとやいはひ玉津嶋、

霞む入江の春のわけほの、

この故に、其薄紅に薄紫に隸けるを形容して、

霧といひ。

海士小舟漕ぎ行く方を見せじとや

浪にたちそふ、浦の朝霧。

霧時雨 富士を見ぬ日ぞ面白き。

こゝを以て、其薄蒼く薄白く漲さるをたへて

濼々といふ。

他なし、其滴化たるや、前者は極めて微細なり、

又概して稀薄なり、之に反して後者は稍粗細なり

又概して濃厚なるによるのみ。

夕鴉かへる翅はかつきえて

霞にのこる、をちかたの山。

稀薄なるが故に、遠くかゝりて映るなり。

山路にも人やまどはひ川霧の

たちこぬさきにいざ渡りなむ。

濃厚なるが故に、時としては近く眼前に迫り來る

ともあるなり。

山の端を見ざらましかば春霞

たてるも知らでへぬべかりけり。

菜の花や霞の下に少しづつ。

之れ吾人の往々遭遇する處にして、比較的が高く

舞ける霞の特性を示せるに非ずや

河霧の麓をこめてたちぬれば

空にぞ秋の山はみえける。 躬 恒

之れ亦吾人の屢目撃する光景にして、低く地の表面……殊に江湖沼澤の邊に逍遙せる霧の特性を語るもの非ずや。

○共に水蒸氣の變態なり、されど古人は歌ひたり、月影のみよするは田上川のみなかみ

稻舟のわづらふ最上川の早き瀬

をこともしらぬ 琵琶の聲

霞のひまに まぎれけり。 讀人不知

鶯の羽風をさむみ春日野の

霞のころも今朝さたつらむ

更に又告げてのこせるあり、曰く

時月黒ク、迷フテ失ヒ道テ不能レ達スル、謙信見ニ甲斐

軍夜爨キ人馬有ワルテ聲也、潜ニ起ツテ摺シ甲ヲ傳ヘ令テ、

擧ニ八千騎ニ出テ、牙營ヲ五鼓詣ニ信立ツ牙營、天會  
大霧、謙信自ニ霧中ニ直ニ斫テ而入。 山 陽

翌ニ披荆棘ニ躡ミ險阻ヲ、深入數里、列レテ卒ヲ數千  
分レ曹吶喊、山壑爲ニ震フ、俄而雨降リ、烟霧濛密

有レ虎走出、將レ突レ圍。 世 弘

乃ち知る、一は閑雅にして親むべきを表し、他は  
壯立にして慣るべからざるを示せるを。

○霞といひ霧といふ共に不透明の浮遊体としては  
同一のもの、されど古來邦人の霞を吟せしもの頗

る多く、霧を咏するもの比較的に少きは何ぞや、  
知らず、霧果して其趣に於て霞に如かざる處ありや否や。

蓋し霞は動的の靜なるものにして、霧は動的の殊  
に動なるもの、既に動的の動なり、この故に一た

び過ぐれば、日月山川、亭榭樓閣、鷄鳴狗吠、松

籟箏韻、擧げて濛々の裡に埋め去る、豈唯古人の所謂五里霧中にして止まらむや、しかも更に一過すれば、たえぐに現れ来るもの、何ぞ當に瀨々の網代木のみならむや、吾人の見を以てすれば、霧は誠に寸歩をも霞に譲るものに非ず。

之を要するに、霞は深窓の佳人の如く、霧は超俗の墨客の如く、彼を水彩畫に比すれば此は薄墨の日本畫と評すべきもの、而して共に其異れる點に於て、特得の趣を存せるものなり。

幼稚園保育上の誤謬

幼稚園の保育に關する誤謬の説の有害なるもの、一は、學校の形式を幼稚園に輸入する事に在る。こは最も重大なる誤にして、やがて幼稚園の發達をも沮言するに至らん。かゝれば、幼兒が眞實の課業に従事する以前に於て、既に學校といふものを厭倦するに至るべし。兎角して理解する事を得る以前に、幼兒を心力的課業に壓しやることは、甚しき失敗の直接の原因なるをかし。若し幼稚園にして、初等學校若しくは幼稚學校の種類と化し、從來の

發達に待つべき幼兒の精神諸力をして、濼弱なる或は機械的活動によりて強制せしむるが如き事をなせば、その幼稚園こそ、やがて、精神なきものにして、圍園に同じからめ。かくて教育系統の中にも加はるを得べからざるに至らん。このいみじき誤の要求たるや、たゞに教育學、心理學のすべての法則を侵すのみに留まらず、抑々又より高尚なる幼兒の自然性、幼兒の道德性を侵言するものにてこそ。

この要求こそ、實に幼兒が生れて尙理解に必要な一つの經驗をも有せざる時に當りて、既に物知りたらんが如くに見せたい望みさいふべけれ。(キンテンガルテンレッグ井ユー)

サンサイ

原米女

この俗語は越中の國、ことに富山地方に、昔から随分と流行つたもので、今はちと澆れ氣味でありますが尙中々に流行ります。

夏の夕、三人以上の十四歳位より歳下の女兒が集りますと、手を引きあつて輪を作り、賑やかに面白く、謠うて環ります、歌は次から次と出で、

環りは絶えませんが、これは女子の遊戯としてはよろしい方ですが歌には感心出来ぬ如何はしいものがあります、風紀上何とか改めたいものです、今其の歌の一二を略譜を添へて御目にかかせよう。

五二  
譜

6.3	5.6.6	7.5	6.6	6.0	6.6.6.5.6.7
サ	ン	サ	イ	ヨ	ン
サ	ノ	ヨ	ナ	イ	カ
5.5	3.3.2.3.3	2.3.2.3.5.6.6	5.5.6.6	5.5.6.6	3.0
シ	メ	ベ	エ	チ	ヨ
ロ	サ	ド	エ	チ	メ
カ	メ	カ	メ	カ	メ

歌

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、おらの(己れ)あんまに(亭主又は情夫をさしていふ、)じよせん(飴のこと)買ふて貰うて、どこで嘗めよか、べら

◎サーイ、サンサイヨン、サノ、ヨ、ナイ、おら

のあんまに、せきだ買ふて貰ふて、どこではこやら、ちやらくと

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、留守どとせまいか、留守どとせまいか小豆五斗煮て團子せまいか。

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、鈍なあんに、どんすの羽織、着せて眺めりやなほどんす。

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、あの坊様よ、この坊様よ、ころも質に置いてけいせ買ふ。

◎サーイ、サンサイヨンサノ、ヨ、ナイ、人の見ぬまに、踊るまいか見まいか島の徳兵衛の(當地に舊時の)嫁見まいか、サーイ、サンサイヨンサノ、

ヨ、ナイ、嫁見りや何んじや、嫁見りや何んじや、目こそへがなり、きりよーよし、サーイ、サンサ

イオンサノ、ヨ、ナイ、きりよがよいとて、こん  
 じやうが知れよか、おさかてつこのばいて(意味不明)つ  
 らばかり」

歌は右の外ほかに澤山たくさんありますが大体これにて、止し  
 ましよ。併しやし右のものより稍長やまき歌詞かしのもの一二  
 あります、略譜りやくふと共に記きしませう。略譜りやくふは先さきのも  
 のと替かりはなく、結尾むすびが稍異ちがりて居ゐます。

調子  
No. 4

6. 3	5	6	6	7.	5	6	6	60	6	6	6	5	6	7
サ	イ	サ	イ	ヨ	ン	サ	ノ	ヨ	ヨ	ナ	イ	ホ	ラ	ノ
5	5	3	3.	2	3	3	3	5	6	6	7	5	5	3
タ	グ	リ	ユ	ラ	キ	ロ	チ	ミ	ヨ	ナ	ミ	シ	カ	マ
2	3	2	3.	5	6	6	6	5	5	6	6	30		
ナ	ガ	キ	ミ	シ	カ	マ	ハ	ノ	タ	グ	リ			

歌

◎サーイ、サンサイオンサノ、ヨ、ナイ、おらの

わんまにたぐり買かふて貰もらふて、三重みへで短みし二重ふたよで  
 長ながし、長ながし短みしこのたぐり。

◎サーイ、サンサイオンサノ、ヨ、ナイ、新庄しんじやう(當地)  
 (名)通とほれば、いばらと藤ふじと、藤ふじが纏むすきつくくいばら  
 とめる、いばらはなしやら帯おびや切きれる。

新年の海 (唱歌) 東 ぐめ

波のつらみも 年の緒の  
 あらたまりたる しるしとて  
 昨日きのうにかはる 調あり  
 波間なまをわけて さしのぼる  
 朝日あさひのかけに あたらしき  
 希望きぼうのひかり か、やきて  
 いそをひざる 波の花  
 沖おきへにすすむ しら帆ほにも  
 皆新みなあらたしき 色見えて  
 年としたつ海うみの めつらしきかな



●歌御會始  
宮中歌御會始は、先月十九日午前  
九時より鳳凰間に於て擧げさせられたりとなり

新年海

御製

あつさゆみ八洲の外もなみかせの

しつかなる世のとしたちらにけり

皇后宮御歌

いくさふねいかりかろしてあた浪も

おとせぬ御代の年いはふらん

東宮御歌

ふねことにしるしの旗手うちなひき

うちにきはしく年たちらにけり

東宮妃御歌

年浪のたてるあしたはうなはらも

わらたまりぬるこゝちこそすれ

●女子高等師範學校 ▲久しく同校教授として

音楽外國語等に付き熱心に教鞭を取られたりし瓜

生繁子先生には、今回依願免官となりたり、斯

道のためまことに惜しき至りといふべし、因みに

先月十七日全校生徒は全教授の送別會を兼ねて、

土曜會を開きたりと▲本年四月入學せしむべき生

徒の入學試験は先月十五日より三日間各地に於て

施行せられたり▲附屬小學校及幼稚園の入校園志

望者は、例年非常の多數に及ぶを以て、本年は一

般志望者に對し抽籤の法を以て、入校園を許可す

る由にて、先月十五日抽籤の結果、同廿二日及廿

七日に於て當籤者を呼び出して入校園を許可した

りといふ ▲同校四年生の修學旅行は左記の如くにてそれ／＼舉行せらるべしとのことなり。即文

科四年生は本月三日四日の兩日町田教授佐方教授松村保姆の下に茨城縣へ理科四年生は同五日六日の兩日中村教授平野舍監吉村訓導の下に静岡縣へ技藝科四年生は同二十三の兩日横山教授喜多見舍監大羽助教諭の下に群馬縣へ。

●女子高等師範學校入學試験問題 先月施行の試験問題左の如し

國語科問題 (二時間)

(注意) 文法の答と解釋の答とは別紙に認むべし

○文法

- (一) 左ノ漢字ニ和訓ヲ付シテ其ノ活用ヲ示セ  
絶 老 射 懲 費
- (二) 動詞ノ名詞法(假體言)ヲ説明セヨ
- (三) 左ノ文ヲ訂正シ且其ノ理由ヲ説明セヨ
- (イ) 此處へ塵芥を捨てるべからず
- (ロ) 正直ならば人に信用さる

(ハ) 少年に金錢を持たすは害あり  
解釋

我が邦にて中古元氣の衰へたりし代にあたり佛法流行して華洛の貴紳ともすれば無常を觀じまた月花に對しては心ものぞかならぬまでにあこがれぬるをぞみやびたる業さしける其の頃の册子の今に遺れるは詞こそやさしく妙なれ上古のてふりには似もよらず異國の六朝又は晚唐の織巧さといふべき調べにぞ流れたるそを今の世の人に教へて衰時の氣象を昭代に移さむとするはいかにぞや

國語科問題 (二時間)

○作文

- 一 自己の學問の經歷 (普通文體)

漢文科問題 (二時間)

(注意) 毎字の傍に音訓の假字を付け別紙に意義を解釋せよ

藤原成親平康頼西光等圖滅平氏、會鹿谷別館謀事、宴醜馬逸、坐者驚起、誤仆、瓶子、成親曰、平氏仆矣、西光曰、盍、梟、其首、康頼進曰、梟、首、檢非違使之任也、取、瓶懸之柱上、二、坐大笑、

二 趙王倫廢賈后、殺之、自加九錫、逼帝禪位、羣與皆爲卿相、奴卒亦加爵位、每朝會、貂蟬盈坐、時人語曰、貂不足、狗尾續、



三

階前萬里、一榻之外皆他人家也、故來見病、  
封豕長蛇、荐食上國、重圍屏息、

歴史科問題 (三時間)

(注意) 本邦史と東洋史、西洋史との答案は各別紙に認むべし

○本邦史

- (一) 平安時代に源氏が東國に立てし功を記せ
- (二) 島原の亂につきて知れる所を述べよ
- (三) 江戸幕府時代の國學者及び漢學者につきて最も著名なるもの各四人を擧げよ

○東洋史西洋史

- (一) 戰國時代に於ける齊秦の疆域は凡そ現今支那の何省の地に當るや
- (二) 拔都の事蹟を問ふ
- (三) 支那にて南北朝の世を稱するは如何なる時代なるや
- (四) 「アッシリア」滅亡後其屬領地内に興りたる國の名及び其位地を問ふ
- (五) 西曆八百四十三年の「ヴェルメン」の和約を説明せよ
- (六) 三十年戦争の原因及び此の戦争に關係したる重なる人の名を問ふ

理科問題 (三時間)

(注意) 物理、化學、博物の答案は各別紙に認むべし

○物理

- (一) 水入れに穿てる二孔の内一孔を閉づれば水は殆んど出入する能はず其理如何
- (二) 水平の面に於て自由に旋り得る磁石の鍼は南北の方向のみを取りて靜止す其理如何

○化學

- (一) 左の場合に於て起る化學變化を記せ
  - (い) 亞鉛に稀硫酸を注加す
  - (ろ) 食鹽に硫酸を注加し之を熱す
  - (は) 鹽化アムモニウムと生石灰との混合物を熱す
  - (に) 石灰石を強熱す
  - (ほ) 硫化鐵に稀硫酸を注加す
- (二) 定比例の定律及び倍数比例の定律を述べよ

○博物

- (一) たんぱくの花の構造に就き知れる所を記せ
- (二) 植物の呼吸作用は空氣に如何なる影響を及ぼすか又之を證明する方法は如何
- (三) 昆蟲類と蜘蛛類との形態に關する差違の重なる諸點を記せ
- (四) 人の心臓に出入する大脈管の員數及び名稱と血液循環の順序を記せ

數學科問題 (三時間)

- (一) 一石ニ付拾六圓五拾錢ノ相場ニテ白米ヲ買ヒ入レ之ヲ壹圓ニ付五升六合替ニテ賣ル時ハ四斗二升入壹俵ヲ賣リテ何程ノ利益アルカ
  - (二) 地球ノ赤道ニ於ケル周圍ハ四〇〇七〇三六八「メートル」ナリ今其二万一千六百分ノ一チ一海里トスル時ハ一海里ハ何町何間何尺トナルカ
  - (三) 絹壹反ノ價ハ紬壹反ヨリ壹圓八拾錢高ク又絹五反ノ價ハ紬七反ノ價ニ等シト云フ各壹反ノ價何程ナルカ
  - (四) 馬三頭ヲ養フ費用ハ羊二十五頭ヲ養フ費用ニ等シトスレバ馬六頭ト羊二十頭トナ一ヶ月間養フ費用ニテ馬九頭ト羊三十頭トヲ幾日間養ヒ得ベキカ
  - (五) 或會社ニ於テ一ヶ年ノ純益金ハ資本金ノ七朱二厘ニ當レリ然ルニ資本金ノ中壹百萬圓ヲ省キテ其餘ニ配當シタルヲ以テ配當ノ歩合ハ八朱ニ當レリト云フ此會社ノ資本金總額幾何ナルカ
  - (六) 頂角ガ直角ナル二等邊三角形ノ高サハ其底邊ノ半分ニ等シキコトヲ證明セヨ
  - (七) 一直線上ニアラザル三ツノ點ヲ過ヤリテ圓周ヲ畫ク方法及其證明ヲ記セヨ
- (注意) (一)(二)ニ就キテハ運算答ヲ明記シ (三)(四)(五)ニ就キテハ、解法運算答ヲ詳記スベシ

裁縫科問題 (三時間)

- (一) 並幅の表地にて本裁女縮入上着并下着廻り各無垢一枚分を普通寸法にして裁合さんとす然らば其總丈幾許を要するか
- 右裁方を圖解し之に各部の名稱寸法を記入し且其積方の算式をも示せ
- (二) 與ふる所の材料を用ゐて男袴の右の片袖を縫ふべし但し寸法は實物二分の一とす

圖畫科問題 (一時間)

- 毛筆畫
- (一) 線畫 筆立に筆 畫業に畫くべし
- (二) 墨畫 菊 畫業に畫くべし

●東京府女子教育會

東京府女子教育會にては先月十八日より毎日曜日三時間づゝ兒童心理(高多しはんがくちゆうじゆんがくしまつりちゆうじゆう) 料理法(女子) 等師範學校教授文學士松本孝次郎(れつり) 料理法(女子) 大學講師赤松峯吉同菊子(くわ)の講習を始めたり卒業期は三ヶ月間會費は一圓五十錢なりとのことなり、目下も尙多少の入會を許すべしと。

●暹羅文部次官と幼稚園

先頃我邦の教育事業

を視察したる、暹羅文部次官には、我國の教育が進歩し居るに驚嘆せし由なるが、就中幼稚園教育の整備したるに感じ、是非自國にても、此の如き制度を實行するの必要ありとて、既に保姆の雇聘方を文部省に依頼したりと。

●江原素六氏の食事の修身談

に曰く歐米の信

教者も教祖の行狀に倣ひ食事ごとに必らず神に感謝の祈禱を捧げざるはなし其旨趣孔子祈る所と全く相異なる所なし。北米合衆國の大統領「ワシントン」も亦食事に對して自ら定めたる行規あり、即ち其言語作法百十則のうち「曰く、食物を道樂とするの風ある勿れ、貪るが如くして食する勿れ、食卓の上にて脊をかがむる勿れ、己の食物に向つて不満を洩す勿れ、如何なる事わりとも食卓の上

にて怒を發すること勿れ、若し來客わらは汝の容貌を温雅にせよ、温言は一皿の肉をも大饗應となすべしと。

それ食事は一日三回づゝ來るものなり、其都度怒を忘れ満足を感じ、愛情を崇め、親睦を増し、和樂以て相食するあらば、不知不識の間に吾人の品性を修養するに盡す所少なからざるべし、箴言に睦ふして乾ける一撮のパンあるは争ありて肥え

たる肉の豊かなるに優れり

又其禮式としては、孔子は食するに語らず、寢るに言はずと、而して近世歐米謳歌者流はいたくこの教規を誹謗せり、曰く食事は貴重なる生命を繋ぎ吾人たる義務を遂行する健康に關するものなり、故に大に喜び且つ楽しんで食ふべきなり、故に犬馬の如くたい食するばかりにあるべからず、宜

しく互に潔く且樂しき款話をなしつつ、頗る興味あるべしと。

吾人は敢て此の如き主旨を排斥するものにあらざらんれども孔子の語らずとは終食の間一言の應答を全く爲すべからずといふにあらざ、たゞ食事は談論の時にあらざるを示したるものなり。

殊に今日の如く衛生の問題露しき時に於て食卓に向ひ、一點憚る所なく口角泡を飛ばし放談をなすが如きは、寧ろ慎しむべきを宜しとす。

歐米の肉食卓に向ひ談話をなすといへども、甚だ小音にして僅かに隣席のものに對し、必用だけの聲を發するに過ぎざるなり。食事の作法につきては往々にして人の品性を上下するをあり、平將軍將門の如き、北條氏政の如き例甚だ少なからず。平將軍會て藤原秀郷と共に食するや、甚だ粗野に

して飯粒前に墮ちければ、遽しく拾ふて之を喰へり、秀郷其輕率にして共に爲すあるに足らざるを知らるや、乃ち去つて貞盛に従ふと。

又北條氏康は其子氏政の食事を爲すを見て歎息落涙して曰く、北條家の基業氏政の代にして斷滅に歸すべしと、侍者驚て其故を問ふ、氏康曰く今氏政が食するを見るに一飯に汁を兩度かけて食せり凡そ人は貴も賤も一日に三度づゝは必らず食するものなれば鍛鍊せずといふことなし、一飯に汁を掛くるに其加減を覺へずして足らざるとて又掛くるとは愚かなることなり、朝夕すべき小事すら此の如し、況んや大事の湧出せし時に於てをや。今日の青年自から盛りし汁、自から汲みし茶を殘し、其他卓上を汚すなど不行跡甚だしきものなきにあらざ、殊に遊戲に浮かれ食事の時を忘れ、

り屢々後れて食事をなし下婢を煩はし臺所の整理を妨ぐるもの甚だ少なからず、大に省る所なかるべからず

食事に對し守るべき教規儒教之を論ずること甚だ深切なり、然りと雖ども具さに之を陳ぶること能はず之を要するに徒らに消極的粗食糲飯をこれとすに非ずして、衛生の理に適ひ滋養に注意して健全の體力を得んとするに在り。

自己の食事に對して注意を要すると同じく、他人の食事に對しても亦大に考慮する所なかるべからずたとへば人を訪問する如き務めて食事時間を避け他人の食事を妨げざる等其他條項甚だ少なからず。

●肺病の傳染につきて  
柴山傳染病研究所技師の所説に曰く

肺病の傳染には二種あり、一は乾燥したる痰中に包蓄せるパチルスが大氣中に飛散し、呼吸に依て吸入すること、一は肺病者が咳したる際細唾に混入し大氣に散するを吸入する之れなり、第一の傳染は大に恐るべきものにて十中八九は之に起因す、第二は尤も重病なるもの、又は三尺以内の距離に對顔したる場合にあらざれば容易に傳染せず、旅館の寢具口洗コップ食器等は大に第二の傳染を助長する機會なることあり

パチルスは乾燥したる空氣中にあるときは幾年經過するも死亡することなし、濕温は攝氏八十度に至れば死亡す、又寒に耐えるの特性あり、人工を以て與ふる冷寒にては決して死することなし、肺病は療治に易き病症なるは現今獨逸醫學界の均しく唱道する處なるか實際然るが如し、獨逸政府が六年前に各病院に命じて肺病以外にて死亡したる者の解剖統計を徴したる百人中六十人は皆肺病に罹り全治したる痕跡を肺に残しありたり、更に病人に向て一々肺に罹りしことの有無を糺し、其無しと答ふるもの、死體を解剖するも同一の結果を得たり、故に人は知らざる間に肺に罹り只軟弱性のもの、み不治の症となるものにして、他の強壯なるものは其治すこと容易なり、一旦肺病に罹りたる者は當人の知ること否に關せず全治したる者は肺に斑痕を存する故、解剖するときは直ちに種別し得るなり、之等は實例に依る時は尤も恐るべき病氣にして、人間の多數は知らざる間に當に罹り居る病氣なり、如此ならば畢竟各自の身體の營養如何により強者には治し易く、弱者には不治の症となる結果となるなり云々（大日本婦人衛生新誌）

## ●有名なる音楽家の報酬

パデレウスキーは一

回の獨奏に一万圓の報酬を得れども興行主は此多額の報酬を支拂ひて尙莫大なる利益を得るを常とす。バツチー夫人は二回の獨吟に一万圓を得クラ、バツト嬢は二日間に三千圓クベリックは一回に五千圓イサエは一回の獨吟に二千圓を得と云ふ。

## ●色を以て精神病を治療す

紐育のポンド及び

モネツトの兩醫士は同地ワード島の婦人病院に於て精神病患者に對し目下新治療法の實驗中なるが此治療法は單に色を用ふるに在りて例へば粗暴なる精神病者は壁を始め總て室内の器物を悉く黒色に塗りたる室に置き以て其精神を和らげ又激しき幽鬱症の人は總て赤色に塗りたる室に置き自から精神を快活ならしむる等患者の種類に依り種々の色を用ふるものなりと云ふ。

## ●遺英美談

遺英中特に兵員を感激させたのは、文筆にも達者な金波樓主人、即ち子爵小笠原少佐が、五百金を投じて自轉車一輛を買ひ、一水兵に其の保管を命じた、イツカ艦内大掃除の初、水兵は此の自轉車を荷つたまゝ、轉蹶してメチャクに之を壊した、恐るゝ此事を小笠原少佐に詫るゝ、ソーカお前に怪我の無かつたのは仕合せでやと言つて、其後自轉車の事は露ほごも口に出さぬ、流石に品位に富める華族の行ひさいふべく、一艦聞き傳へて皆感涙を催ふしたとのことである (日本)

## ●教員檢定本試験問題 (承前)

## ●英語科

GRAMMAR.

## 1. Translate into English :

- (a) 貴君は月に三度位は手紙を下まつてもよさそうなるものです
- (b) 平生感張つて居る人に限つていざさなるさ真先に逃げ出すものだ
- (c) 日本の今日あるは外國語の研究大に與つて力あり

(2) 身を殺して口をなす、口を殺して命を人々にむらに  
利己の權り固り、その身を殺して命を人々にむらに  
こころをなす

- Write sentences containing the following word and phrases in their right use: *once, due, doubt, suspect; tired of, tired with / not to mind, not to care!*
- Explain the grammatical use of the italicized words:  
He never sees me *that* he does not complain. The members of the club can stay there all day and not *pay* a cent.
- write sentences containing the following prepositional verbs, and explain the meaning in English to: *inquire of, to inquire for, to inquire at, to inquire into, to inquire about, to inquire after; to talk on, to talk over, to talk about, to talk at.*

READING

Our guide had reserved what he considered to be his greatest wonder till the last—a royal Egyptian mummy, best-preserved in the world, perhaps. He took us there. He felt so sure, this time, that some of his old enthusiasm came back to him “See, gentlemen!—Mummy! Mummy!” The eye-glass, came up as calmly, as deliberately as ever. “Ah—what did I understand you to say gentlemen’s name was?”

“Name?—He got no name!—Mummy!—Gyptain mummy!”

“Yes, yes. Born here?”

No! ‘Gyptain mummy!’

“Ah, just so, Frenchman, I presume?”

“No! not Frenchman. Roman—born Egypt!”

“Born in Egypta. Never heard of Egypta before. Foreign

locality, likely. Mummy—mummy. How calm he is—

how self-possessed. Is, ah—‘is he dead?’” “Oh, *score blue*, been

dead three thousand year!”

● 家事科

一、建坪を五十坪前後として官吏(家族は老母主人夫妻子供三人  
養生一人下婢二人)の住宅を建築せんことを其圖面を調製すべし、  
但し右の内若干坪を二階建となす

二、左の事項を日用帳に記入すべし

十月二十一日

一 俸給百五十圓 一 老母小遣七圓 一 月謝二圓 一 給

料五圓五十錢 一 來客費用一圓二十五錢 一 足袋三足五

十一錢五厘 一 來客用座蒲團五枚二十圓 一 西京親戚へ

物品郵送費二十四錢

同二十三日

一 石鹼一箱九十錢 一 炭二俵一圓 一 古寶藏書豫約金本

月分一圓五十錢 一 慈善會切符三枚六圓 一 國旗六十錢

一 貸地七百坪地代受取百五圓 一 植木屋一日雇二人一圓

一 寶丹一包二十錢  
 三、左の事項を高等女學校第五學年の生徒に教授するものとして  
 一時間分の教授草案を作るべし

一 綱帶用法

●地理科

- 一、滿州に於ける鐵道線に付きて述べよ
  - 二、ベルムーズス(Bermudas)及アゾレス(Azores)の生物群に付きて知る所を記せ
  - 三、人種の區別は何を標準として定むるや
  - 四、支那の鑛業に就きて知る處を記せ
  - 五、アルプス山脈を横過する主なる通路につき記せ
  - 六、カスロ海(Caspien Sea)死海(Dead Sea)ヘリー湖(Lake Erie)十和田湖、諏訪湖及八郎瀉の成因を述べよ
  - 七、オーストラリアに於ける人文の發達を促がせし諸原因に就きて記せ
  - 八、山脈及火山脈とは如何なるものなるか
  - 九、イタリア國の略圖を畫き左の地名を記入せよ  
 ローマ ナポリ ミラノ ベネチア  
 プリンジツ シエノバ フイレントツエ サンマリノ
- 以上四時間  
 女子師範學校師範學校女子部、高等女學校のみの教員を志願したる者は二、三に答ふるを要せず  
 (以下次號)

會 報

入 之 部

小石川區新諏訪町五五  
 神田錦町三の六  
 島根縣那賀郡美又村追原尋常小學校  
 兵庫縣揖保郡龍野町々立幼稚園

轉 居 之 部

本郷區西片町十番地へ  
 和歌山縣海草郡黒江町へ  
 千葉縣千葉町へ  
 靜岡縣沼津町私立駿東高等女學校へ  
 牛込區山伏町三二へ  
 群馬縣高崎市堰代町清水キヨ方へ

會 費 領 收

一金九	十	錢	自三十五年四月	至三十五年十二月	松井正子
一金一	圓		自三十五年二月	至三十五年十一月	師岡のぶ
一金四	十	錢	自三十五年九月	至三十五年十二月	服部作枝
一金五	十	錢	自三十五年十一月	至三十五年十二月	伊藤 眞
一金六	十	錢	自三十五年六月	至三十五年十二月	瀧野てる

自明治三十五年十二月十六日  
 至明治三十六年一月二十五日



一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢	一金六十錢
自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月	自三十六年五月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

村上先  
松村ひさ  
中村五六  
東基吉  
桑邱ます  
木原いさ  
利光しづ  
笠井梅野  
深川きよ  
大野朝比奈  
戸村やす  
鈴木れい  
岡本ちか  
平野てふ  
吉田幸  
矢作てつ  
藤澤さつき  
淺井はつ  
柳川松子

一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢	一金十錢
自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月	自三十六年一月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

萩野しほ  
工富かね  
上野かく  
保井この  
堺さき  
宇佐美はる  
森岩太郎  
齋藤清太郎  
武井綱故  
土井玉子  
永井あい  
三好すゝ  
加納てる  
山田せん  
富田八千代  
平野みよ  
小柳ゆき  
宮崎もさ  
高木なみ  
安東てい  
村井あい  
木村さらえ

一金十	錢	三十六年一月	相川みれ
一金十	錢	三十六年一月	根來政衛
一金十	錢	三十六年一月	藤岡さき
一金十	錢	三十六年一月	内田たれ
一金十	錢	三十六年一月	岩田ゆき
一金十	錢	三十六年一月	益田一枝
一金十	錢	三十六年一月	奈良あい
一金十	錢	三十六年一月	芳賀きぬ
一金十	錢	三十六年一月	大岩のぶ
一金十	錢	三十六年一月	石橋つれよ
一金十	錢	三十六年七月	大森國
一金五	錢	自三十五年七月	丸山さめ
一金五	錢	自三十五年九月	永田けい
一金一	圓	自三十五年四月	伊澤丑三
一金六	錢	自三十五年九月	手塚不二夫
一金十	錢	自三十五年二月	三好すゝ
一金十	錢	三十五年十二月	永井あい
一金一圓二十錢	錢	自三十四年十一月	高橋忠次郎
一金六十錢	錢	自三十五年九月	城戸長能
一金五十錢	錢	自三十五年十二月	依岡あい
一金一	圓	自三十六年九月	塚本るい

新年早々は多数愛讀各位より  
本會宛て年始の賀狀賜はり御  
厚情の程深く奉謝候一々答禮  
可致の處會務多端にて缺禮致  
し候あしからず御了承被下度  
候。

# フレーベル會規則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレンチベル會ト稱シ東京ニ置ク  
ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ獻出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ  
特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達セシガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ  
一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保  
育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス  
會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ  
一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保  
育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス  
一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス  
但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス  
一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス  
一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク  
會長 一人 會務ヲ總理ス  
主幹 一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス  
幹事 十人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス  
評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス  
但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルトコト  
アルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更  
スルコトヲ得ス

## 謹告

本誌第一號に掲載すべく豫告したりし幼稚園案内は筆者に事故ありて延引せり追つて近刊の分に掲載するを得べし。

次號には過日歸朝せる下田次郎氏の歐洲視察談を始め松本孝次郎氏の幼兒の聽覺の講話下村三四吉氏の黒澤登幾子故飯島八千溪氏の新入學の子供小林雨峰氏の春風春水其他附屬幼稚園保育の要項等を掲載することを豫告す。

本誌は讀者各位より家庭に關する事項の外一般女子教育等に關する事實論說其他各地の狀況等の投稿を望む。

會員各位はなるべく御知友の入會を紹介せられんことを希望す。

東洋唯一の週刊新聞!!!

# 明治新報

毎週一回月曜日發行

定價 郵税共一部金三錢●十三部金三十六錢

●二十五部金六拾五錢●五十部金一圓二十錢

## 特色

●主義は不偏不黨●農工業改良の稱首●家庭の改善●商況精確●每號美しき寫真版を挿入し●社會の重要なる出來事は勿論娛樂の分子に到る迄漏らさず處なし

## 本紙第一週年紀念

として愛讀諸君に報ゆる爲本紙五十部の代金を前金にて二月末日迄に拂込せられたる諸君に申込順に依りたる番號券を配附し置き翌月より毎月一回抽籤を以て向ふ一ヶ年間左の

景品を贈呈す

景品目録  
一 二 三 四 五 六  
等 等 等 等 等 等

銀側懷中時計  
置形縮緬半襟  
新珍塗製煙草入  
チヱリ洗粉  
以下二十等迄景品進呈す

個個掛本  
一一一一二

但し申込入三千名を越ゆる時は金側懷中時計一個を特等とし

●既に一ヶ年分拂込済の諸君は代金の滿つる月迄抽籤に加ふ  
●抽籤の方法は本紙を見らるべし

東京市麴町區飯田町五丁目廿四番地

申込所

明治新報支社

大 改 良

# 家庭

● 毎月一回五日發行 ● 明治三十年一月第三卷第一號發行 ● 定價一部八錢半年分四十二錢一年分八十錢郵稅共

東京府巢鴨村二二五五

家庭庶務部

後付二

● 注意 ● 次號 南條博士の講話 ● 注意 ●

「家庭」は佛教の根底に立ち起されたる唯一の宗教的女學雜誌なり  
 「家庭」は宗教の自覺に依りて社會を見、國家を見、道徳を見、夫婦を見、男子女子を見、親を見、子を見、兄弟姉妹を見るなり  
 「家庭」衛生を語り、育兒法を語り、裁縫を教へ、交際法を教へ、また衛生を語り、日常女子の裁縫などに応用するべき學術  
 料理法を教へ、日常女子の裁縫などに応用するべき學術  
 技藝を教へ、文學を教へ、和歌の講義は或國文の講義を語る也 ● 講讀する人は座として宗教上の説話を聞  
 義を語る也 ● 講讀する人は座として宗教上の説話を聞  
 料理人裁縫師學者醫師等を常に聘し

● 注意 ● 次號 南條博士の講話 ● 注意 ●

次 目

◎愛に飢えたる兒童◎入門◎	◎小兒の衛生◎	◎女學の裁縫◎	◎西洋料理法◎	◎日本料理法◎	◎眞の交際法◎	◎御正月(小説)◎	◎妻君と下女◎	◎女子と宗教◎	◎萬葉集講義◎	◎和文評釋◎	◎色彩の話(光り話)◎
◎觀音	仁藤雪三子作	鹽田彦清	小川清	山崎川	左山	挿内や	大内や	掃除	安藤	山北	伊藤
◎本領	藤雪三子作	川彦清	田彦清	山崎川	左山	挿内や	大内や	掃除	安藤	山北	伊藤
◎誤れる哉	仁藤雪三子作	鹽田彦清	小川清	山崎川	左山	挿内や	大内や	掃除	安藤	山北	伊藤
◎報道	仁藤雪三子作	川彦清	田彦清	山崎川	左山	挿内や	大内や	掃除	安藤	山北	伊藤

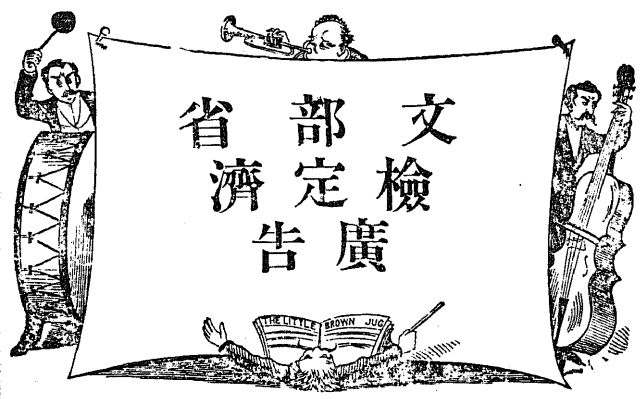
# 謹告

陳者拙者主任にて發行致し居り候大日本割烹學會通信教授用料理講義錄紙上第九號二月五日發行より禮式に就て必要の科目婚禮式技藝品作り方等掲載の順序に達し候に付何卒此際御入會相成度且つ有志御友人方も御勧誘相成度此段御通知に及び候規則は御申越次第送呈致候尙規則上は前記壹號より發送の都合には候得共特に第九號よりの御注文に應して發送可致候に付御入會の節は壹號よりか又は九號よりか委細御申越被下度候

大日本割烹學會

主任 石井泰次郎

明治三十四年二月廿八日  
 第三種郵便物許可



空前の唱歌良教科書！  
 檢定済生徒用唱歌教科書の嚆矢  
**唱歌教科書**  
 文部省檢定済

郵税一冊に就き金四錢

發行以來唯一の完全なる唱歌教科書と  
 して非常なる大喝采  
 を博し僅々數月間に  
 三版發行の盛運に會  
 生徒用教師用共其  
 部の檢定を経て更  
 らに其眞價を發揮す  
 るの榮を得たり  
 從來文部省檢定済  
 即ち教師の参考書と  
 して許せられたる  
 のみにして生徒用即  
 ち眞の教科書とし  
 て檢定を経たるもの  
 りは實に本書か如何  
 該科の教授上最完全  
 なる良書たるかを  
 知るに足るべし

教師用		生徒用	
第一卷	定價金三十錢	全四冊	定價金十八錢
第二卷	定價金三十錢	第一卷	定價金十五錢
第三卷	定價金三十錢	第二卷	定價金十五錢
第四卷	定價金三十錢	第三卷	定價金十五錢
第五卷	定價金三十錢	第四卷	定價金十五錢

- **洋琴** 金參百圓以上 各種
- **グワイオリン** 金五圓以上五拾圓迄 各種
- **樂隊用樂器** 大太鼓金貳拾圓以上 小太鼓八圓半以上 シンバル 金四圓以上 其他バス、バットン、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等 金貳拾圓以上 百六拾圓迄
- **鼓隊用樂器** 太鼓金貳拾圓以上 橫笛金壹圓以上 ○學校用一組拾三圓
- **手風琴** 金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種
- **保險山葉風琴** 定價金十六圓五十錢 以上金貳百圓迄
- 右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジヨレット 其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種
- **ピアノ、調律修繕** オルガン
- **郵券二錢附目錄進呈**